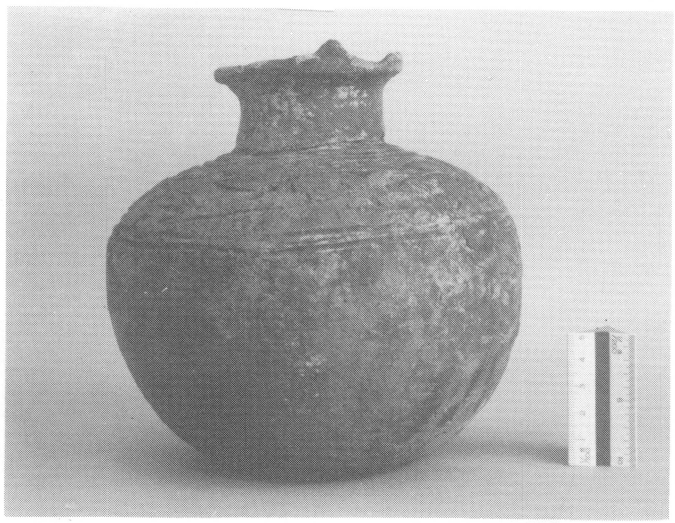
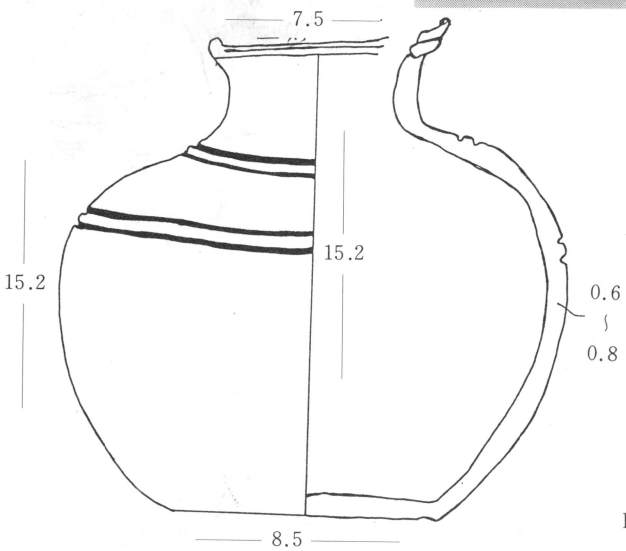
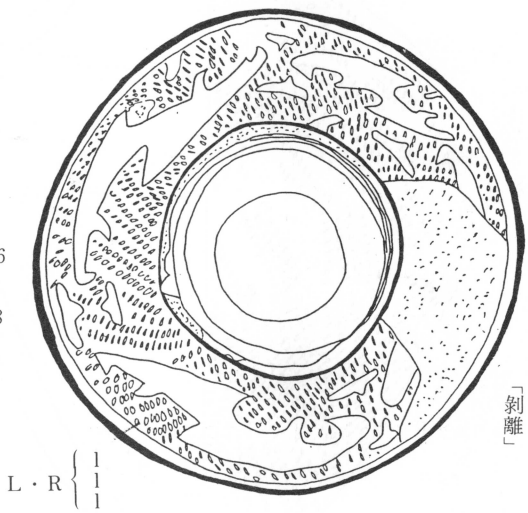
〔壺形土器〕

A.P.L46

58　　L 6 Ⅲ







〔壺形土器〕－58　（精製）

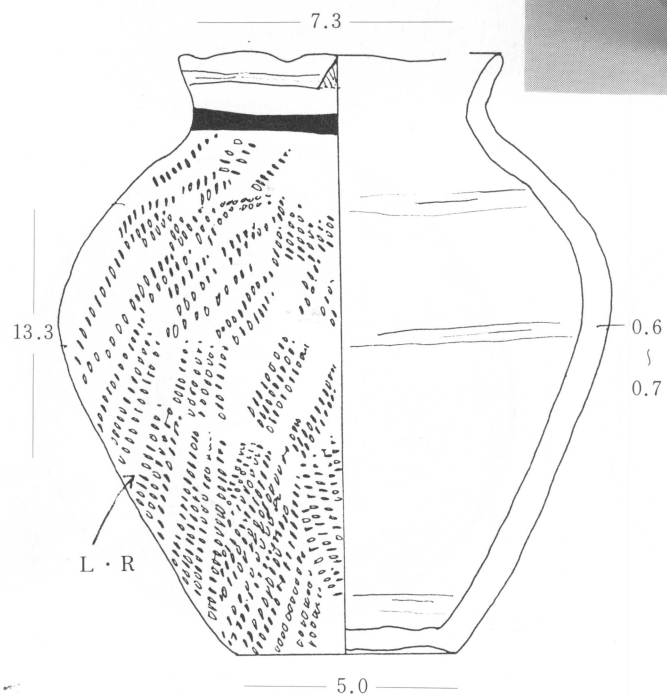
☆　(58) は、ＡＮ２地区Ｌ６区Ⅲ層出土の第８群土器（大洞Ｃ２式）である。

- (58) の器形は、口縁部は、平縁であるが、「山型突起」と、その両側に「二叉山型突起」を配置するもので、頚部は、ほぼ直立する。肩部は張らず胴部はふくらみをもつ器形で底部は「平底」を呈するものである。
- 施文は、肩部に２条、胴部の最大幅部に２条の平行沈線文がめぐり、施文帯を区画している。この施文帯には、「大洞Ｃ２式」の雲形文が施文されるものである。また底面にも１条の沈線文が施文される。
- 色調は、朱ぬり土器であるため、外面は、灰赤色を呈し、胎土・焼成は良いが軟質である。

〔壺形土器〕

A.P.L47

59　　AH2Ⅲ



〔壺形土器〕－59　（粗製）

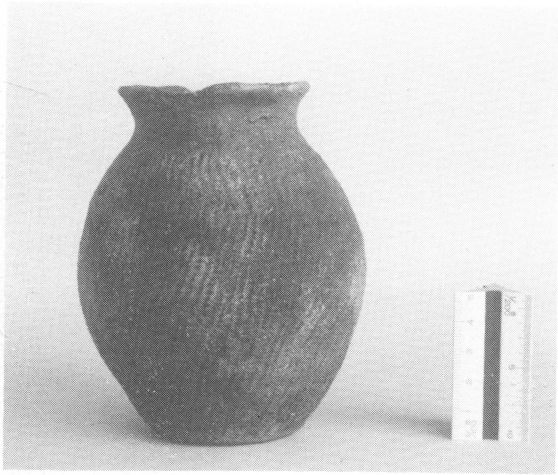
☆　(59) は、AH2Ⅲ出土の第8群土器（大洞C2式）である。

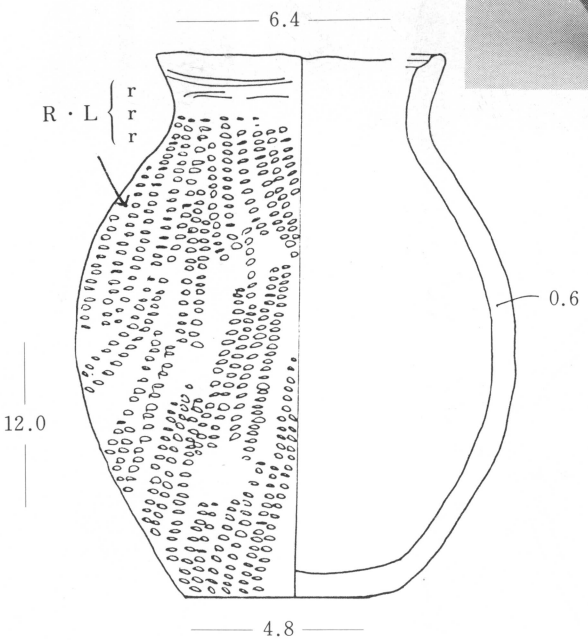
- この土器の器形は、口頸部が「くの字」状に外反し、肩部がわずかに張るもので、最大幅部は、中央上にあって底部に向ってしまる器形である。底面は、やや「上げ底」ぎみである。
- 施文は、肩部下より底部まで、二段単節縄文L・Rが密に、しかも不整に施文されるものである。
- 色調は、外面黄褐色、内面灰黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好、堅緻である。

〔壺形土器〕

A.P.L48

60　　AH1Ⅳ





〔壺形土器〕－60　（粗製）

☆　(60) は、AH1Ⅳ出土の第10群土器（大洞A式）である。

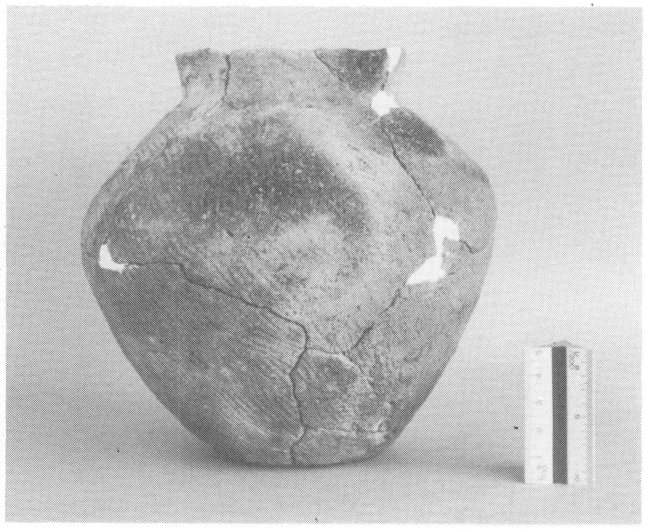
- この壺形土器の器形は、口縁は平縁で、口頸部は弧状に外反し、肩部が張らず、最大幅部は、胴下部にある器形で、底面は「平底」である。
- 施文は、口縁内側に沈線文が1条めぐり、肩部下に0段多条のR・L縄文が施文されるものである。
- 色調は、外面赤褐色、内面灰黄褐色、胎土・焼成とも良く堅緻である。

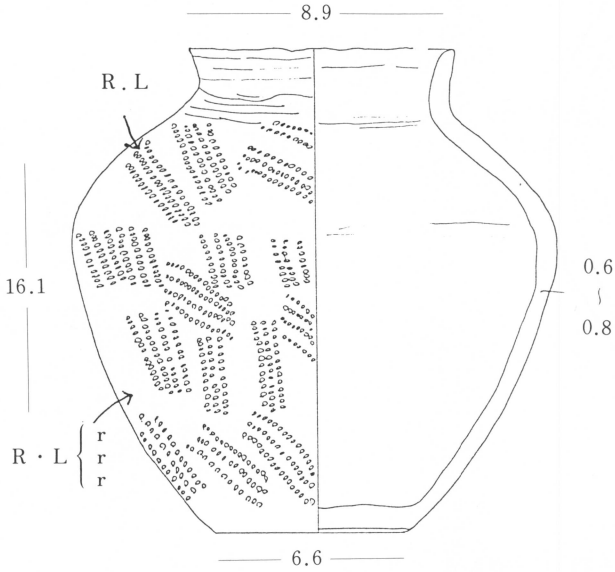
※　なお、縄文時代晩期で二段単節縄文（R・L）が施文されるものは少なく、壺形土器に施文されたものは、若干出土するようである。(但し、当地区をフィールドとする場合)

〔壺形土器〕

A.P.L49

61　　AH2Ⅲ





〔壺形土器〕－58　（粗製）

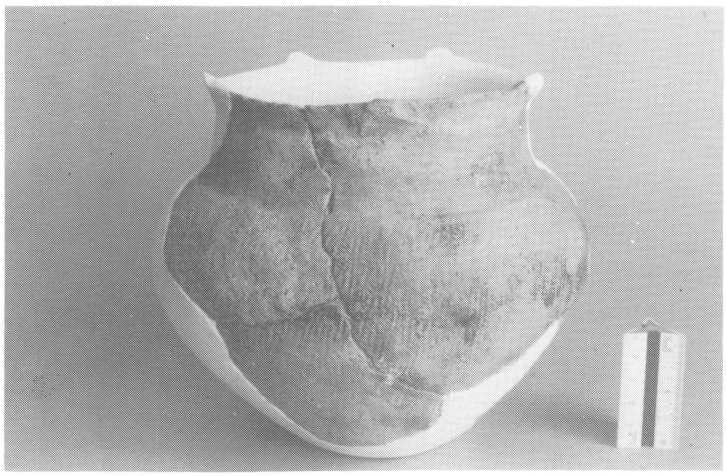
☆　(61) は、AH2Ⅲ出土の第8群土器（大洞C2式）である。

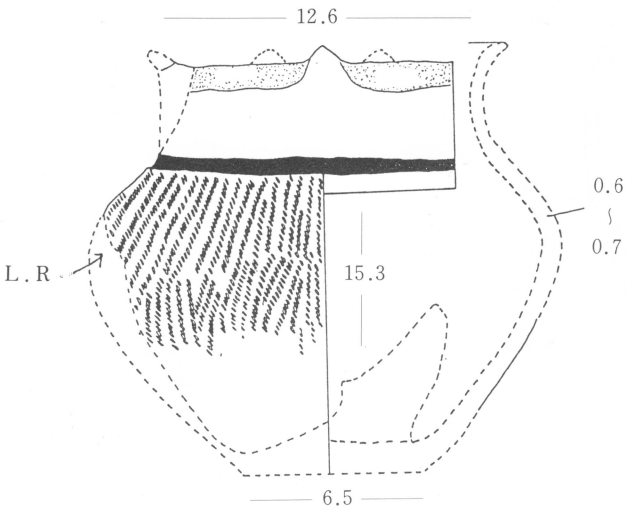
- このものの器形は、口縁は平縁で、口頸部は外反するが外反のしかたが弱く、最大幅部は、器高の上部にある器形で、底面は「上げ底」を呈する。
- 施文は、口頸部は無文で、肩部下には、R・L縄文が施文される。
- 色調は、外面赤褐色、一部暗褐色、内面灰褐色を呈する。胎土・焼成ともやや悪く、ザラザラしている。

〔壺形土器〕

A.P.L50

62　　AH3Ⅲ





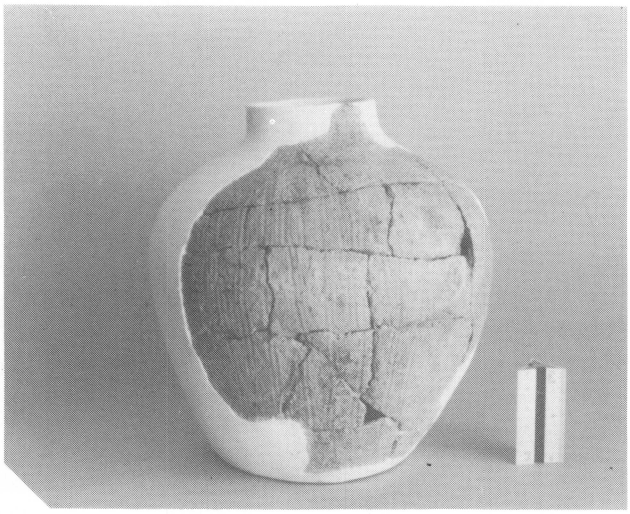
〔壺形土器〕－62　（粗製）

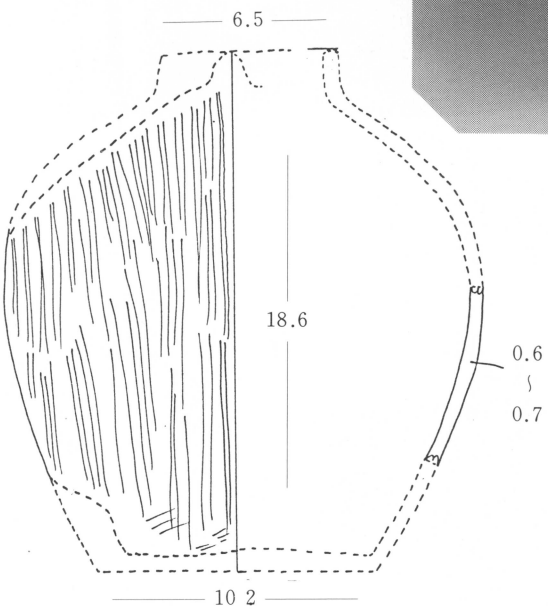
☆　(62) とした壺形土器は、AH3Ⅲ出土の第8群土器（大洞C2式）である。

- この土器は、平縁に外側へやや突出する「突起」を5～6こ付すもので、口頸部は広く、広口壺と言っても過言ではない。肩部がふくらみをもって張る器形で、底面は、欠失したものである。
- 施文は、口頸部は無文で肩部下に、0段多条のL·R縄文が左下りに施文されるものである。
- 色調は、外面灰褐色、一部黒色、内面灰黄褐色を呈する。胎土は良いが焼成がやや不良である。

※　なお、このものは、大洞C2式の後半に出現するようである。

63　　AH2Ⅲ





〔壺形土器〕－63　（粗製）

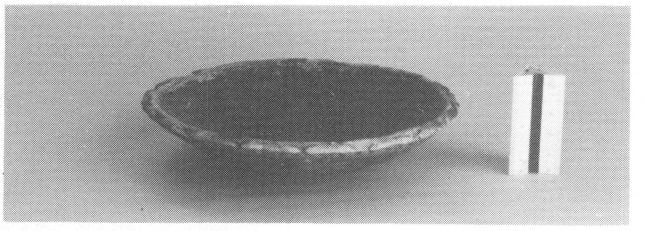
☆　(63) は、A地区H 2 グリットⅢ層より出土した第10群土器（大洞A式）である。

- この土器の器形は、器高に比して口頸部が短かいもので、口縁部がわずかに残るが、多分平縁のものらしい。肩部〜胴部はふくらみをもつ器形で、「短頸壺」と言っても良い器形である。
- 施文は、口頸部が無文で肩部より「条痕文」が施文されている。底面は、欠失して不明である。
- 色調は、灰黄褐色（内外とも）を呈し、胎土には、微粒砂を含むが焼成も良く堅緻である。

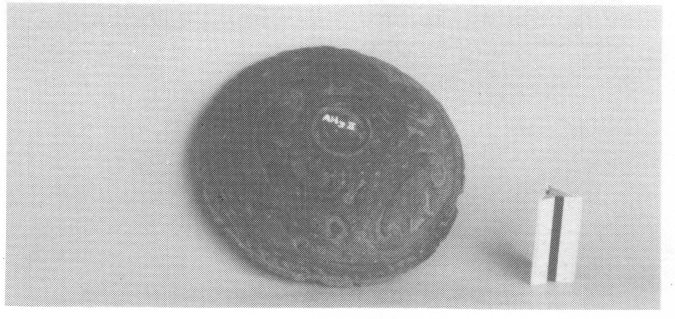
〔皿形土器〕

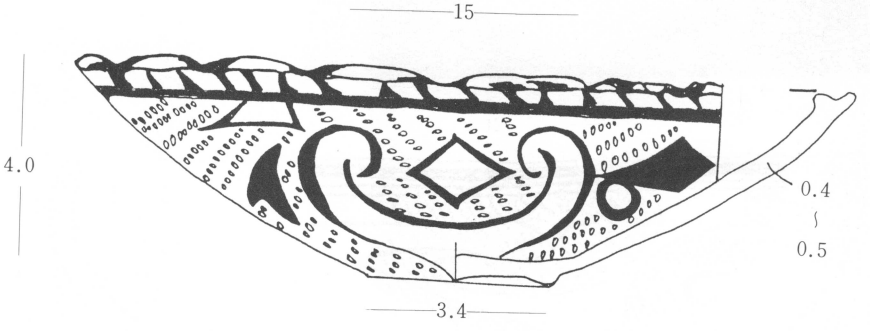
A.P.L52

64 a　　AH 3 Ⅱ



64 b



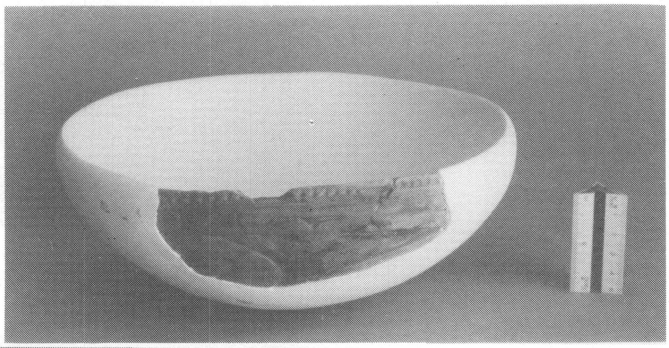


〔皿形土器〕－64　（精製）

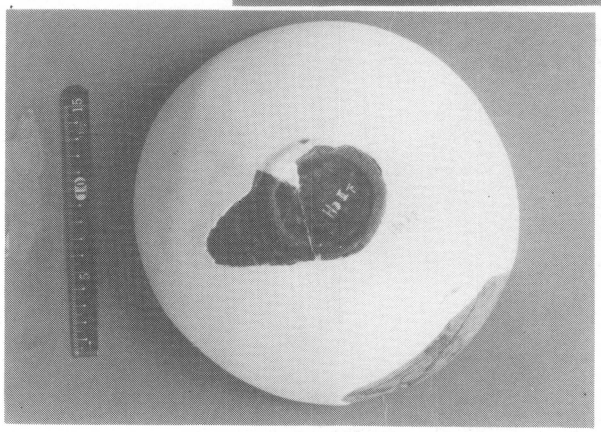
☆　(64) としたものは、AH 3 Ⅱ出土の第７群土器（大洞C１式）である。

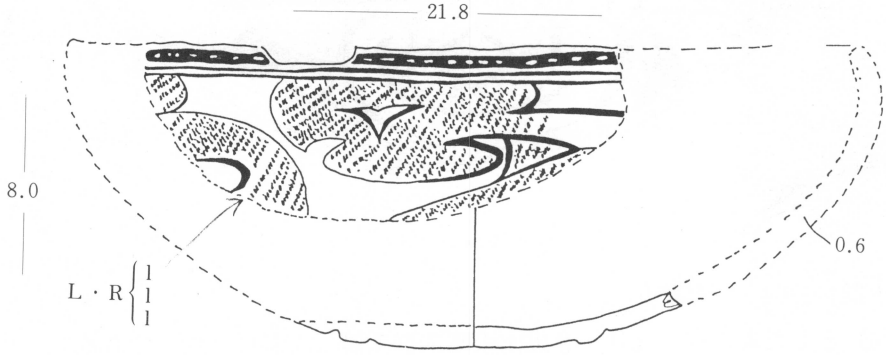
- この (64) の器形は、きわめて浅いもので、口縁は平縁であるが、口唇部に「刻目文」があるため、小波状を呈する。口頸部は、ほんのわずかに外反するが、胴部も、わずかにふくらみ底部に至る器形である。
- 施文は、口唇部に「刻目文」口縁直下には２条の沈線によって、第１施文帯を区画し、そこには、右下りの「刻目文」が施文されている。肩部下に沈線文１条、底部直上に沈線文が１条めぐり、第２施文帯を区画する。この第２施文帯には、磨消手法による雲形文（菱形文・C字文）が浮きぼりにされている。
- 色調は、内外面とも暗黒色、胎土はやや悪いが焼成は良く堅緻である。

65 a　　AH 3 Ⅱ



65 b





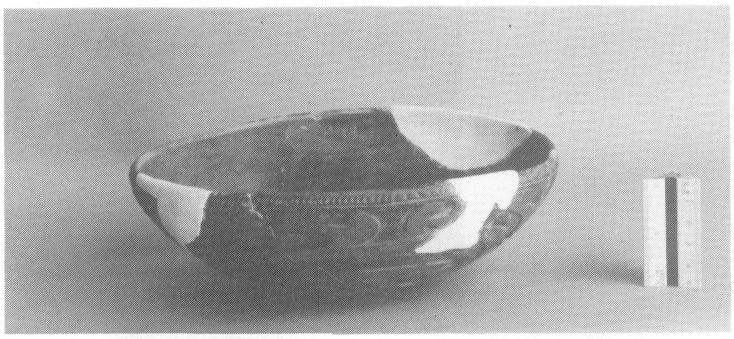
〔皿形土器〕－65　（精製）

☆　(65) は、AH 3 Ⅱ出土の第7群土器（大洞C 1 式）である。（現存約$\frac{1}{8}$）

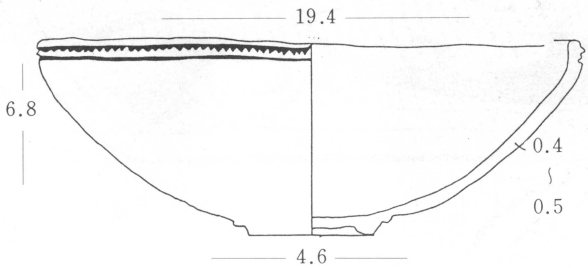
- この皿形土器は、口縁が平縁で、口頸部が強く内傾する器形で、底面は、やや中高のものである。
- 施文は、口縁直下に「刻目文」その下に（肩部）2条の細い沈線文と、底部直上にも2条の沈線文があり、第2文様帯を区画している。この文様帯には、「X字文～K字文」が施文されているものらしい。
- 色調は、内外とも灰黒色、胎土・焼成は良い。

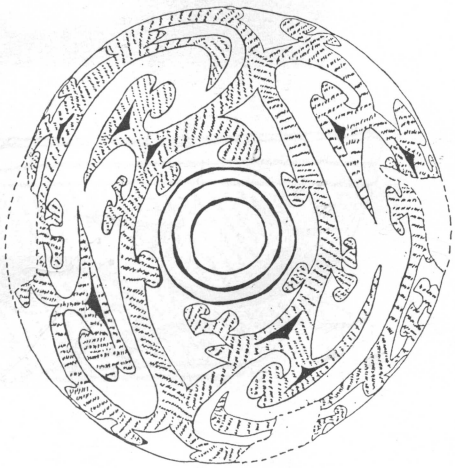
〔皿形土器〕

66 a　　AH 2 Ⅱ



66 b





〔皿形土器〕－66　（精製）

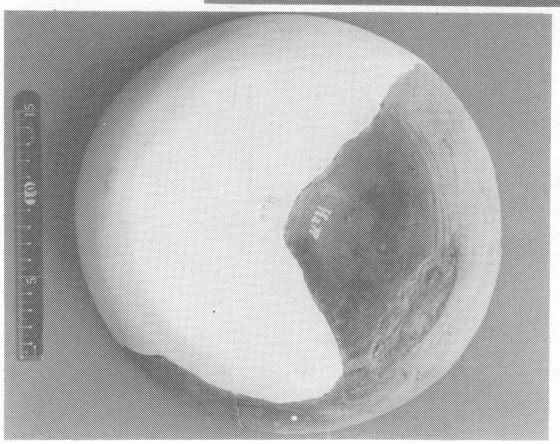
☆　(66) は、AH 2 Ⅱ出土の第７群土器（大洞C１式）である。

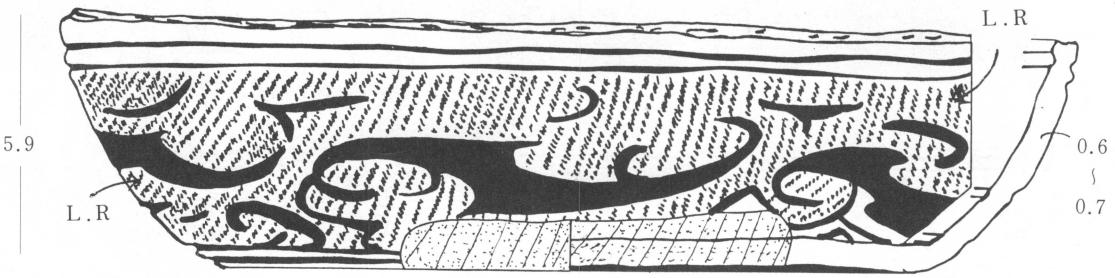
- この皿形土器の器形は、平縁で口頸部は内傾し、肩部以下は、ゆるくふくらむ器形で、底面は、「上げ底」で、しかも中高のものである。
- 施文は、口縁直下には、左下りの「刻目文」がめぐり、肩部には２条の沈線文が施文され、底部直上にも２条の沈線文が施文され、この両者の間に施文帯を構成している。施文帯には、「X字状文」が磨消手法によって浮文が施文されている。
- 色調は、内外面とも暗黒色を呈し、胎土・焼成とも最良である。

〔皿形土器〕

67 a　　AH2Ⅳ

67 b



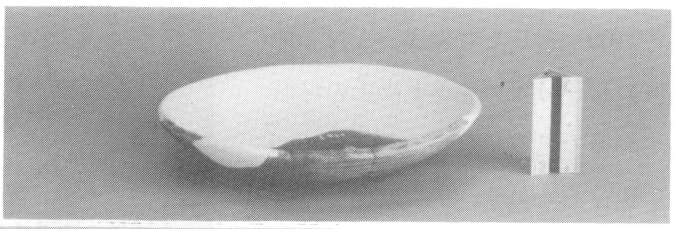


〔皿形土器〕－67　（精製）

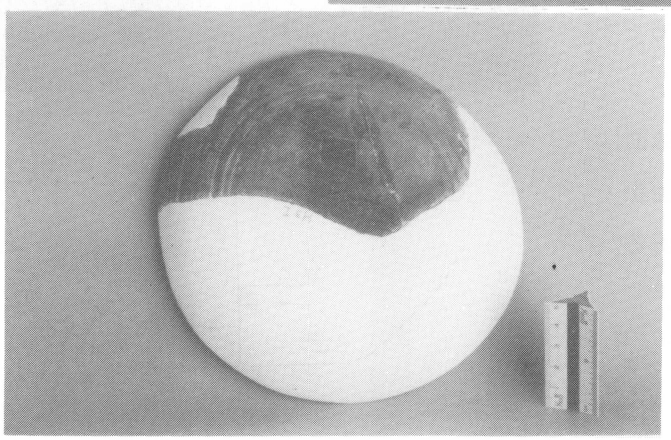
☆　(67) は、AH2Ⅳ出土の第8群土器である。

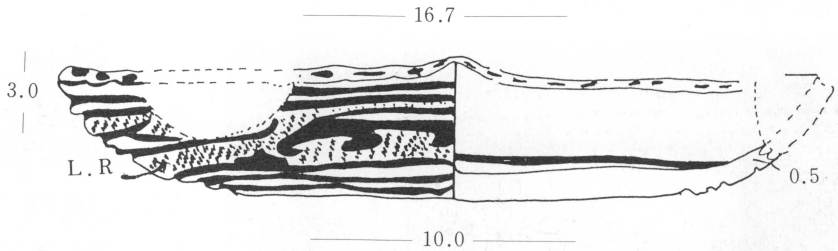
- この (67) は、大皿で、しかも口径と底径の差が小さく、且つ器高が底いものである。口縁は平縁であるが、やや口頸部が内傾し、胴部は、ややふくらむ器形である。
- 施文は、口唇部に短沈線があり、口縁下に2条、底部上に3条の平行沈線がめぐるもので、これによって区画される文様帯には、やや細い沈線によって「曲線文」があり、縄文（L・R）が充慎される。また、磨消手法による無文帯も認められるものである。なお、内面の胴部下位には、2条の沈線文が見られるが、このような施文は珍らしい。
- 色調は、内外面とも白灰褐色を呈し、胎土・焼成とも最良である。

68 a　　AH 3 I



68 b





〔皿形土器〕－68　（精製）

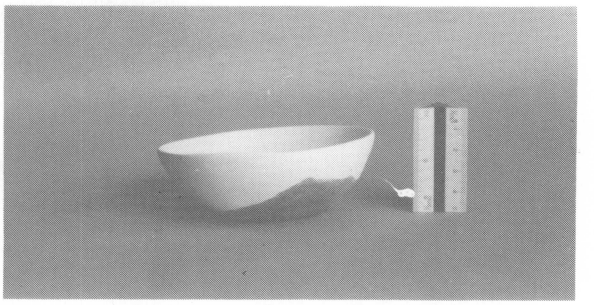
☆　(68) は、AH 3 I 出土の第８群土器（大洞C 2 式）である。

- この (68) の器形は、口縁は平縁であるが、口唇部に短沈線があるため、わずかに小波状を呈する。また、口縁から胴部へかけて、わずかにふくらむもので、器高は小さく浅いものである。
- 施文は、口唇部に短沈線があり、口縁直下に2条、底部上に３条の沈線文があって文様帯を区画している。この文様帯には、「曲線文」が施文されている。但し、この曲線文は、平行沈線文が主体をなし、部分的に曲線化する。沈線文の空間には縄文が充填され（L・R)、無文の磨消帯も配置されるものらしい。また、内面に沈線文が１条、底部と胴部の境に施文されている。
- 色調は、外面灰褐色、内面灰黒色を呈し、胎土・焼成は良く堅緻である。

〔土師器－坏〕

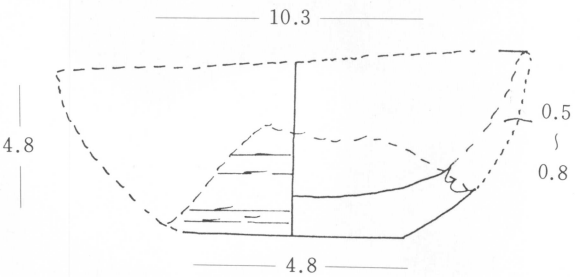
A.P.L57

69　　L・M6Ⅱ

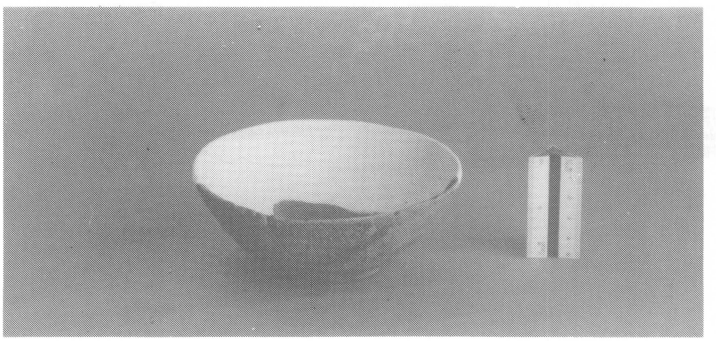


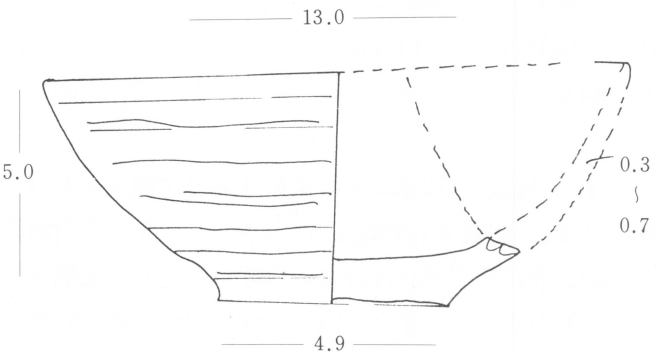
☆　(69) としたものは、AN4地区のL・M6グリット出土の坏形土師器である。

- 現存約$\frac{1}{8}$弱で、多少無理して復原したもので、多分実測図のような器形と思われる。
- 色調は、明燈色を呈し、底面は「へら切りと観察される。胎土・焼成とも良く、多少軟質である。



70　　⑥Ⅱ



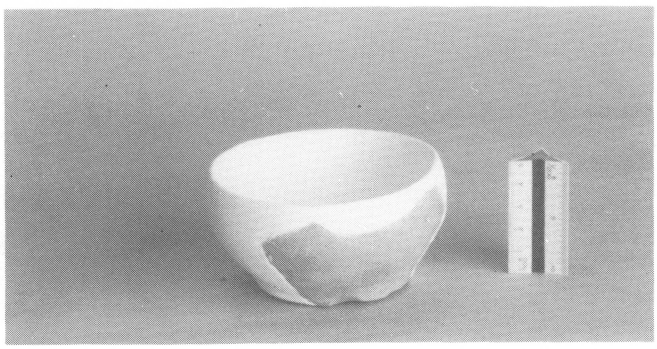


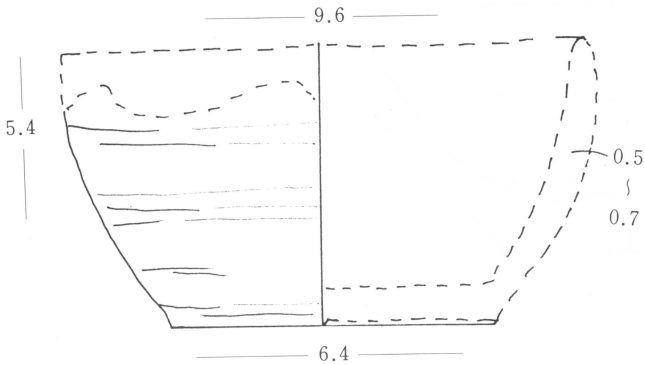
〔土師器－坏〕

☆　(70) は、AC～F区⑥グリットⅡ層出土の土師器（坏形）である。

- このものの器形は、碗形をなし、底面には、「糸切り痕」もなく、やや「上げ底」を呈する。
- 器内・外面とも磨耗が烈しく、水引き痕は認められるが「ナデ」の有無、その方向は不明である。
- 色調は、明燈色を呈し、胎土は精選されているが焼成は、やや軟質である。

71 AH2Ⅱ





〔土師器一坏〕 —71

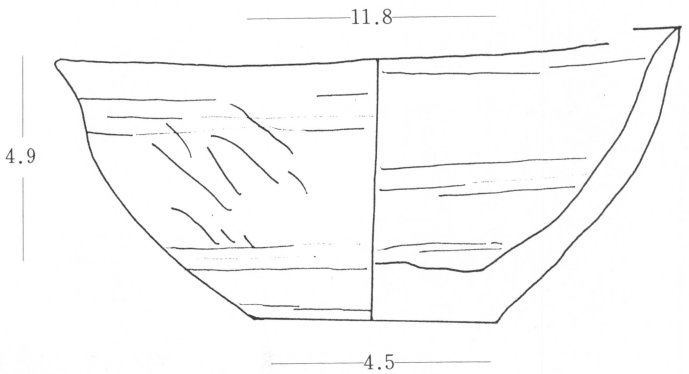
☆ (71) は、AH2Ⅱ出土の第11群土器である。

- この坏形土師器は、口頸部、その他は欠失しているが、図上で復原を試みたものである。(現存$\frac{1}{6}$) 器形は、やや小形で胎土が厚いもので、口頸部が内湾するもののようである。成形はロクロの回転によるものらしく、「水引き痕」が胴部に認められる。また、底面には、回転ロクロによる「糸切り」痕が認められる。
- 色調は、暗褐色を呈し、胎土・焼成も良く持ち重りのするもので堅緻である。

〔土師器－坏〕

A.P.L59

72　　（2号住居址内）



〔土師器－坏〕－72

☆　(72) は、AC～F区の2号住居址内（床面上）より出土したものである。

- この (72) の器形は、口縁部が外反し、肩部がふくらみ、胴部もゆるく、ふくらむ器形で、底面は、「へら」切り痕を認めるものである。
- 色調は、明赤褐色を呈し、(内外とも) 器内、外面ともよく整形されたもので、「ナデ」方向は左上より右下方向である。胎土・焼成とも極めて良く堅緻である。

※　なお、この坏形土師器は、内外面とも平滑面をなしており、器形にも特色があり、あるいは、移入されたものではないかと考えている。類例を持って、さらに検討したいと思う。

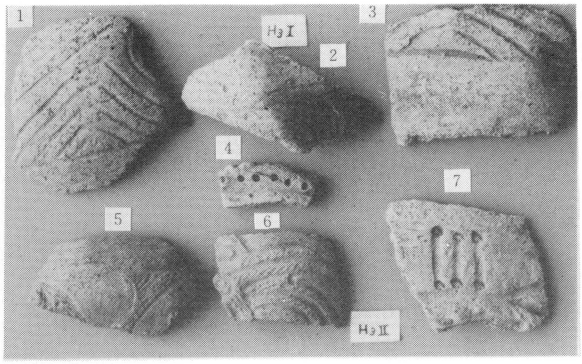
〔後期・晩期の土器〕

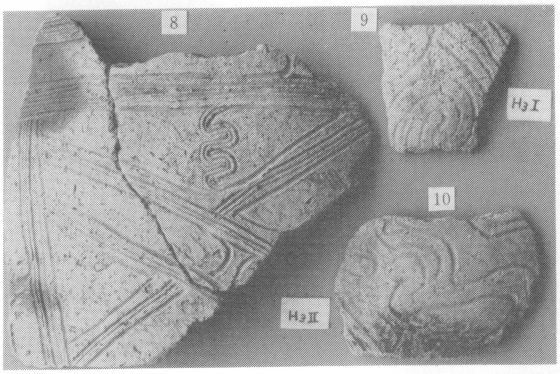
（H3 Ⅰ～H3 Ⅱ出土）

☆（1・3）→第4群土器

☆（4）→第5群土器

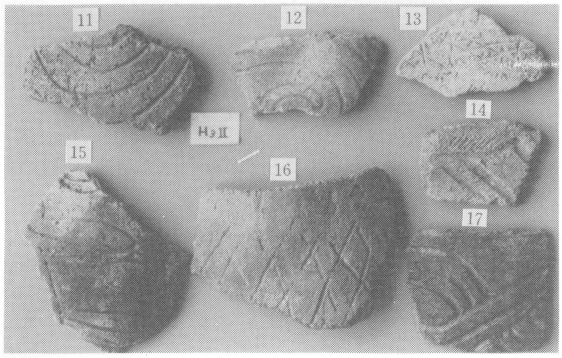
（註）第4群土器は、十腰内Ⅰ・Ⅱ式の中間型式。以下も同様。

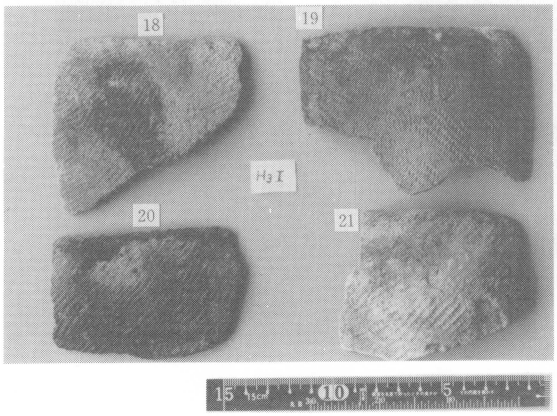




☆（9）→第4群？

〔注記のないもの〕→ { 第3群土器 / 十腰内Ⅰ式 }





☆（18～21）→ { 晩期の土器 / 大洞C2式 }

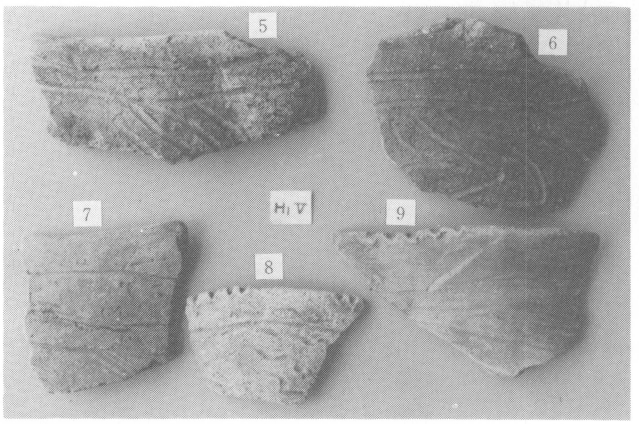
（註）

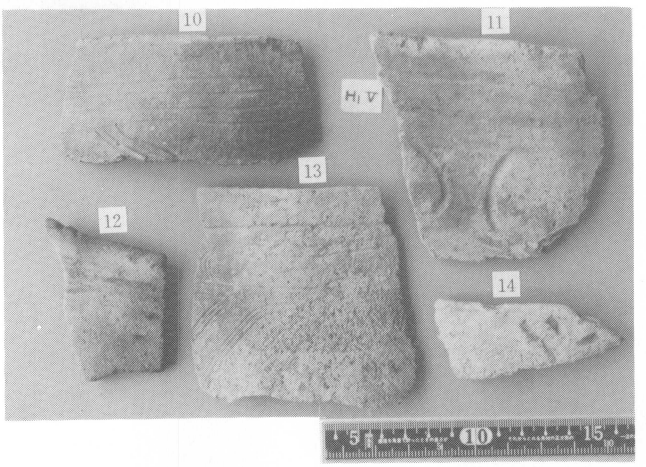
H1～3＝グリット名
H3 Ⓘ＝出土層
} 以下も同様

〔後期の土器〕

（H1 V出土）

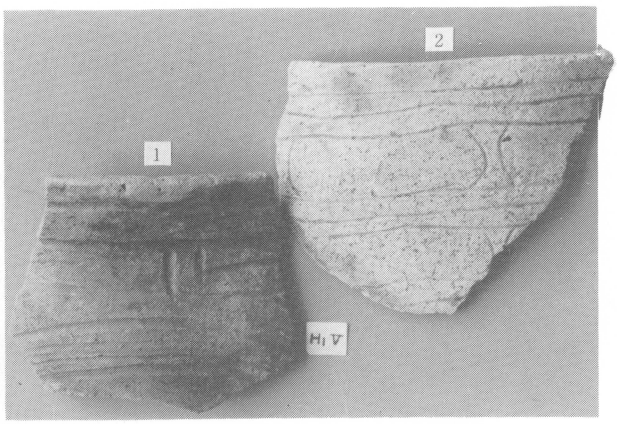
☆（1～14）→ { 第3群土器 十腰内Ⅰ式 }

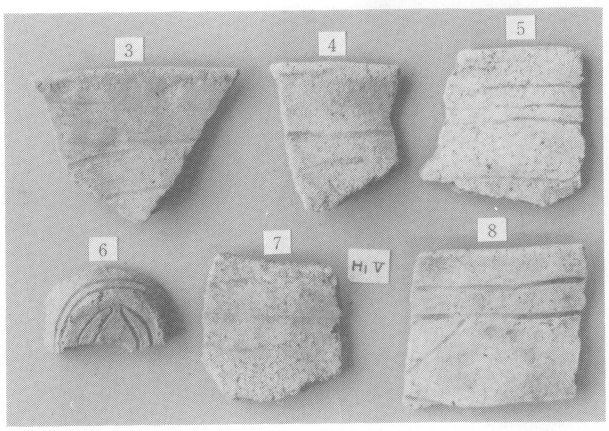




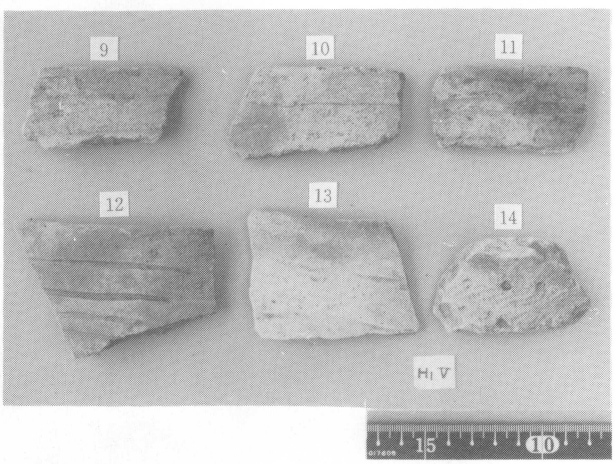
（H1Ⅴ出土）

☆（1～13）→ 第3群土器 十腰内Ⅰ式



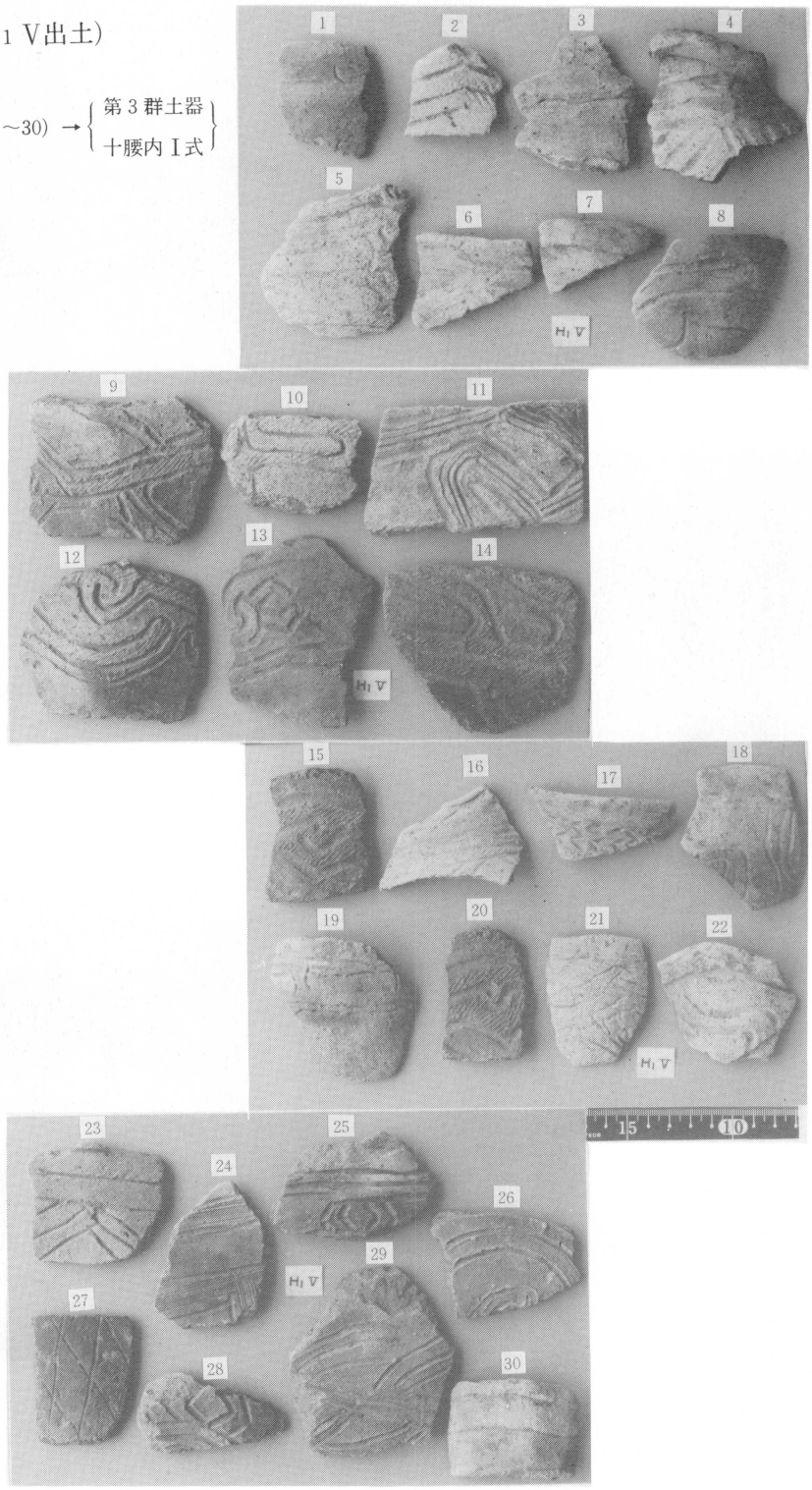


☆（14）→ 第5群土器 十腰内Ⅱ式



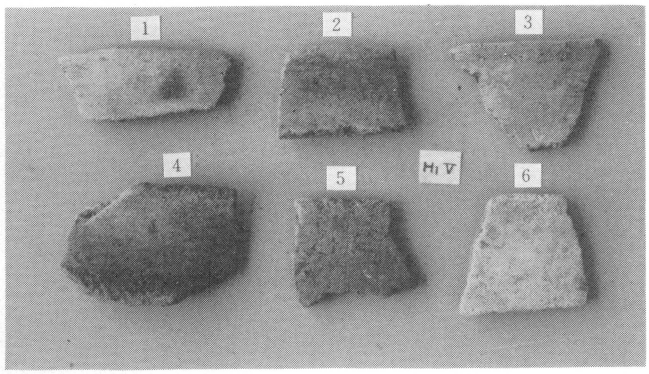
（H1 V出土）

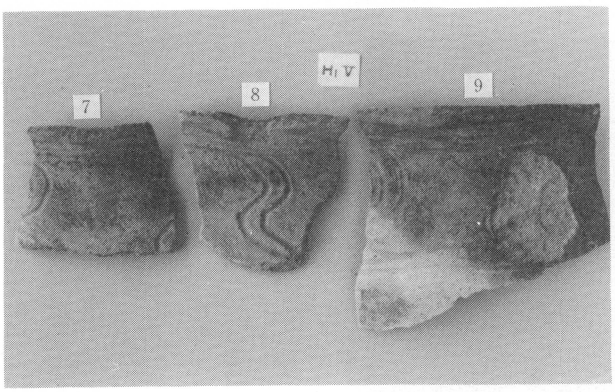
☆（1～30）→ { 第3群土器 / 十腰内Ⅰ式 }

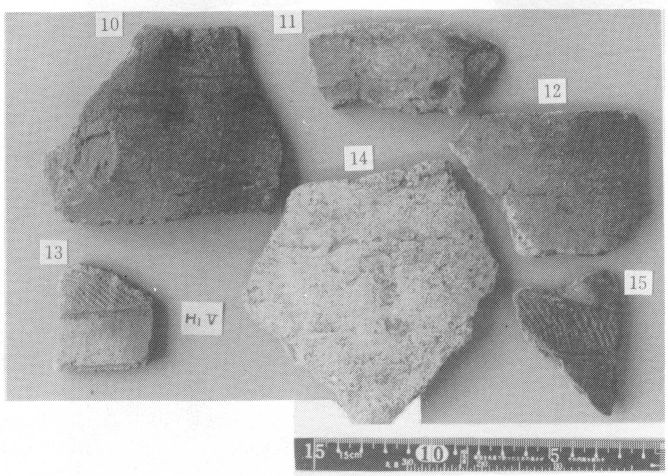


（H1 V出土）

☆（1～15）→ 第4群土器 十腰内Ⅰ・Ⅱ式 の中間型式



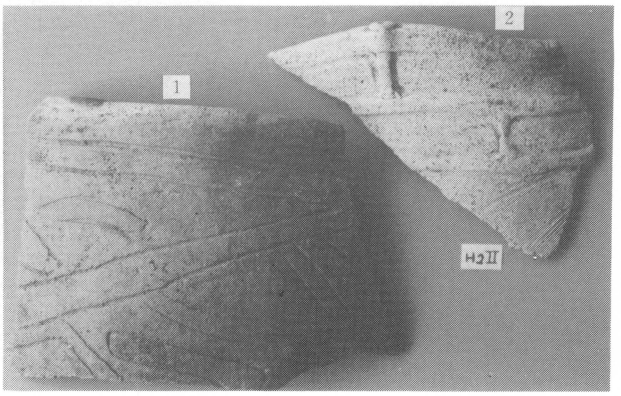


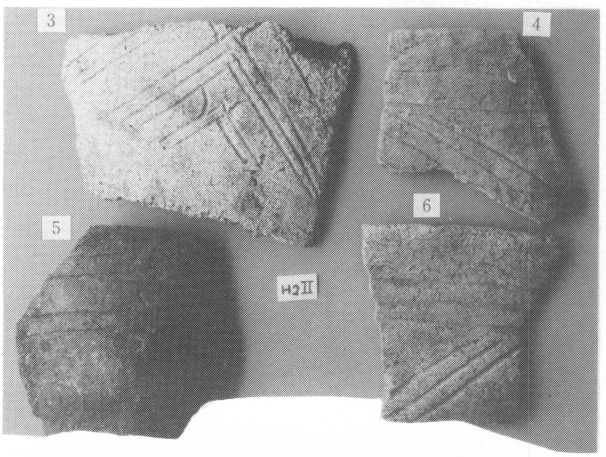


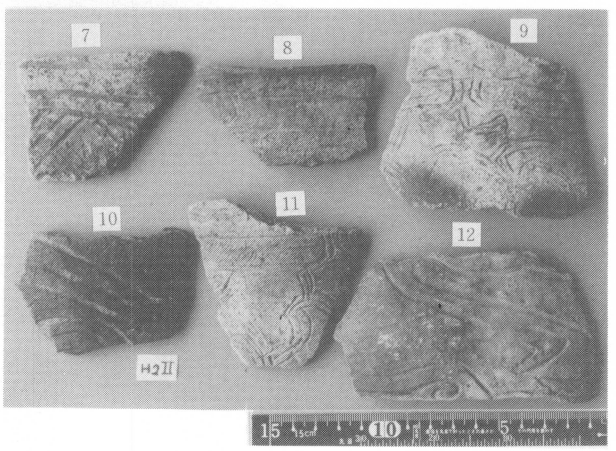
〔後期の土器〕

（H 2 Ⅱ出土）

☆（1 ～12）→ { 第 3 群土器 / 十腰内 I 式 }

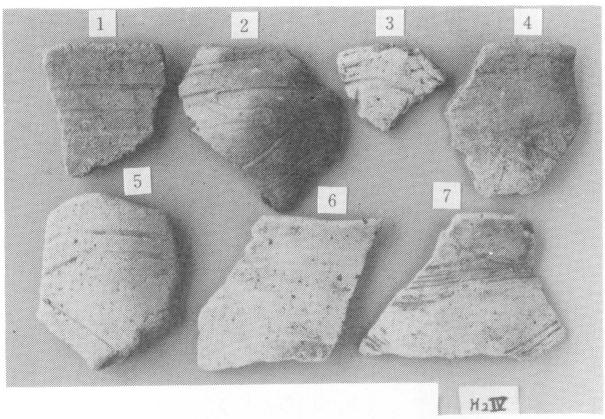


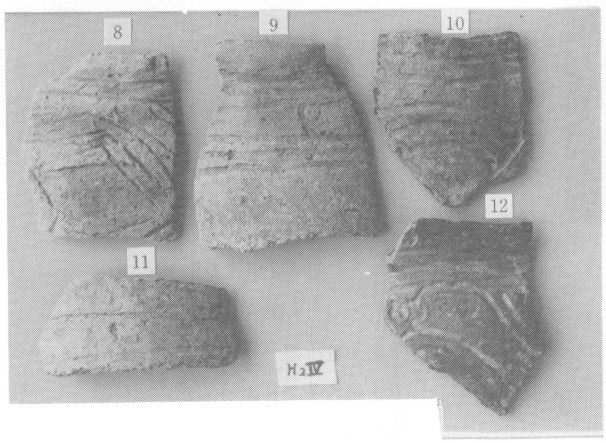


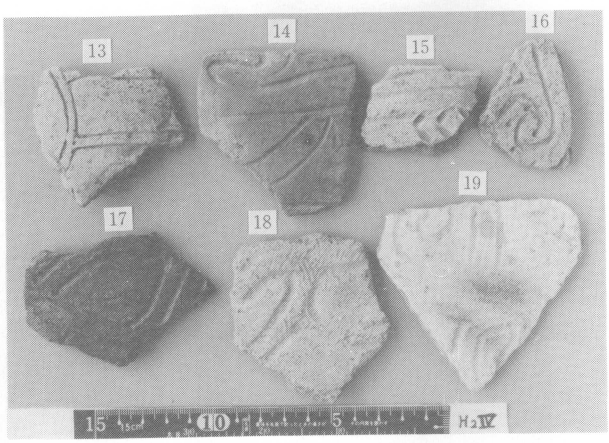


（H2Ⅳ出土）

☆（1～19）→ { 第3群土器 / 十腰内Ⅰ式 }

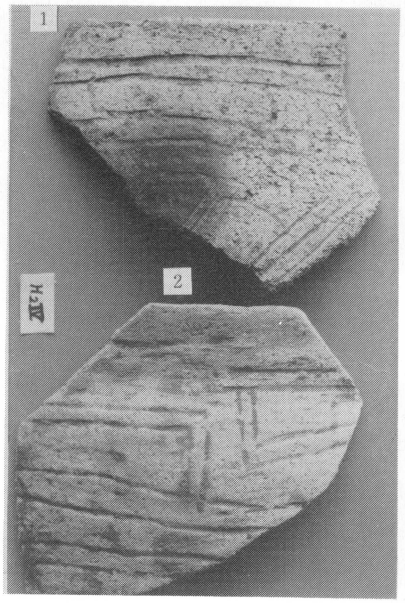






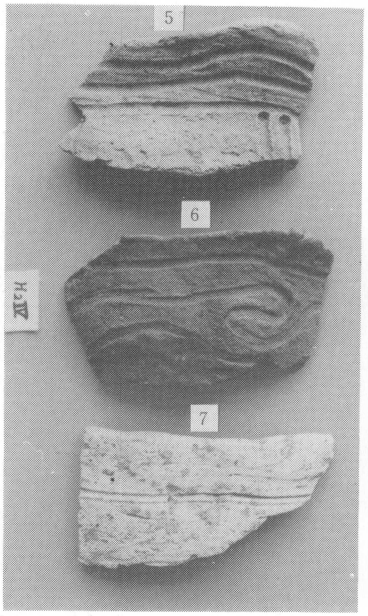
〔後期の土器〕

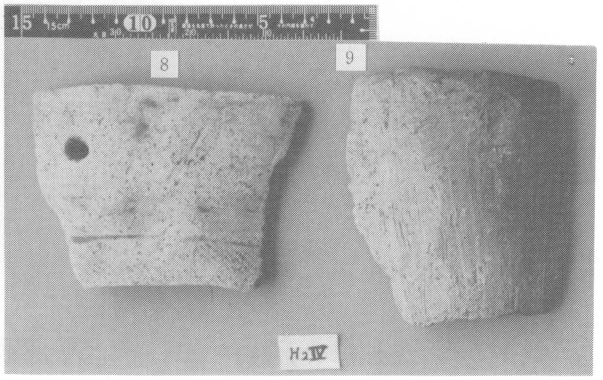
（H2Ⅳ出土）



☆（1～7・9）→ { 第3群土器 十腰内Ⅰ式 }

☆（8）→ { 第4群土器 十腰内Ⅰ・Ⅱ式 の中間型式 }

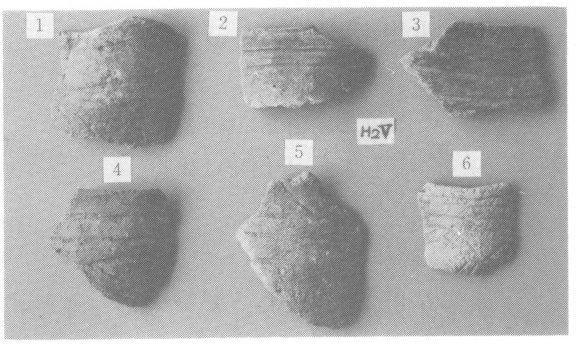


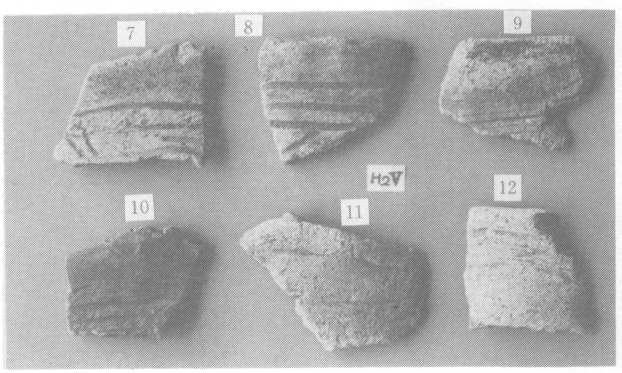


（H2 Ⅰ～H2 Ⅱ出土
H2 Ⅴ出土）

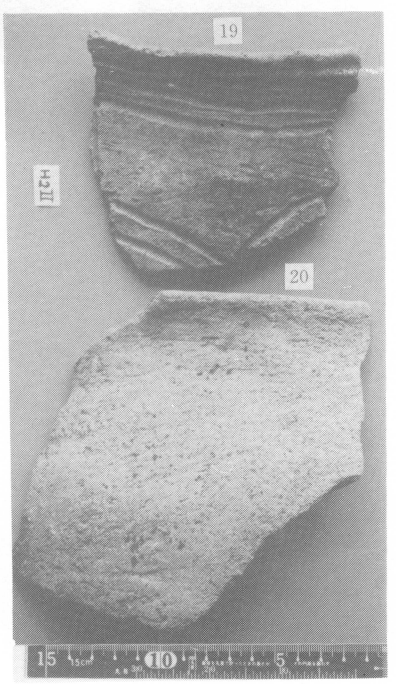
☆（1～12, 19）→｛第3群土器 十腰内Ⅰ式｝

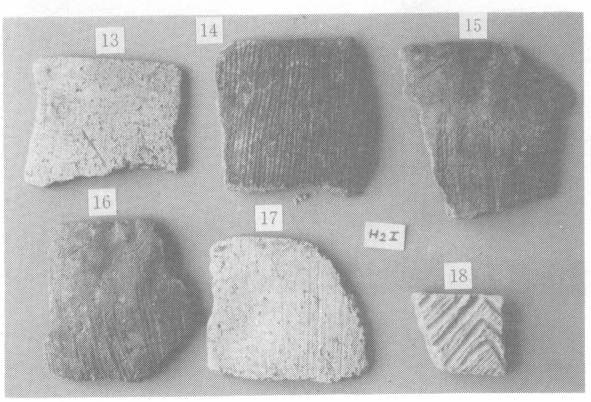
☆（18・20）→｛第4群土器 十腰内Ⅰ・Ⅱ式 の中間型式｝





☆（13～17）→｛晩期の土器 大洞C2式｝



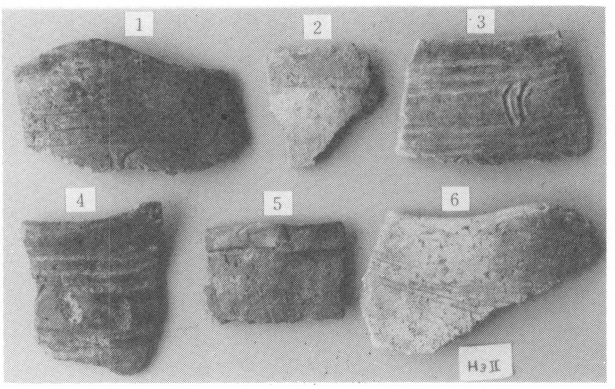


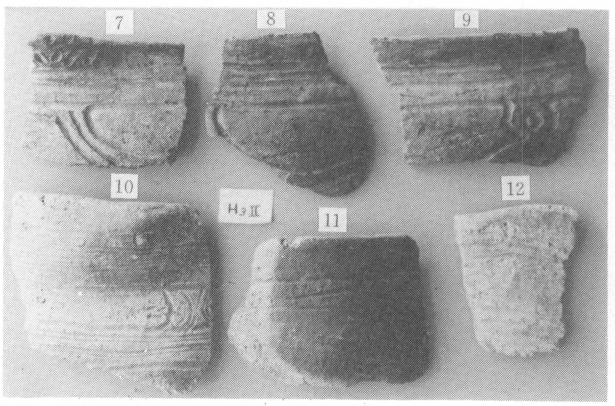
〔後期の土器〕

B.P.L10

（H3Ⅱ出土）

☆（1～16）→ { 第3群土器 / 十腰内Ⅰ式 }



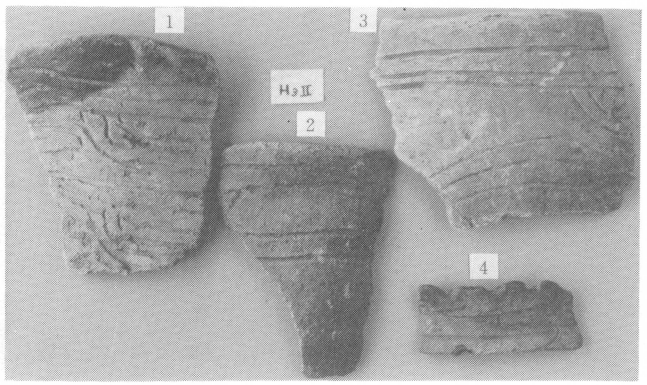


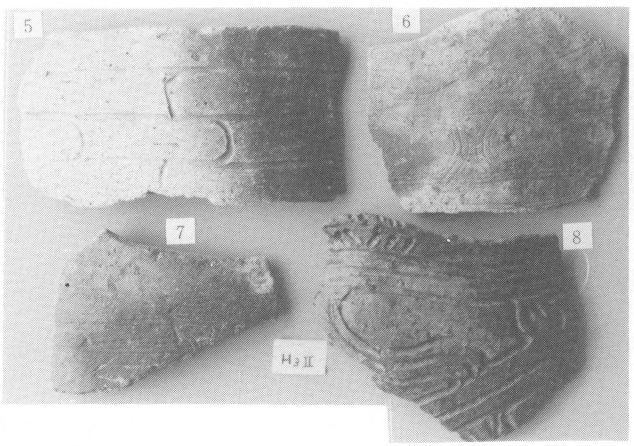
〔後期の土器〕

B.P.L11

（H2Ⅱ出土）

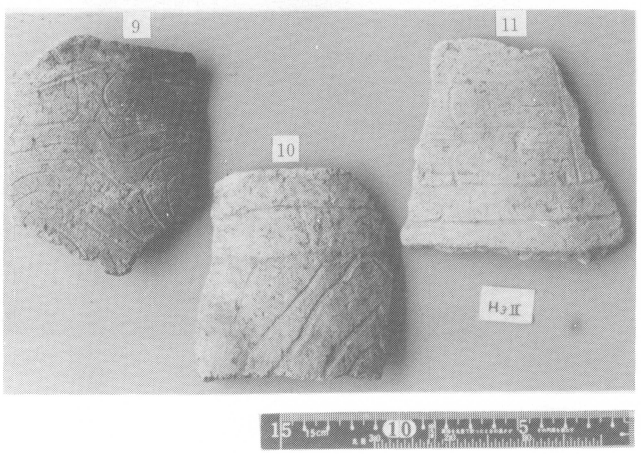
☆（1～11）→ ｛第3群土器 十腰内Ⅰ式｝





（註）｛H3＝グリット名 H3Ⅱ＝出土層｝

（以下も同様）

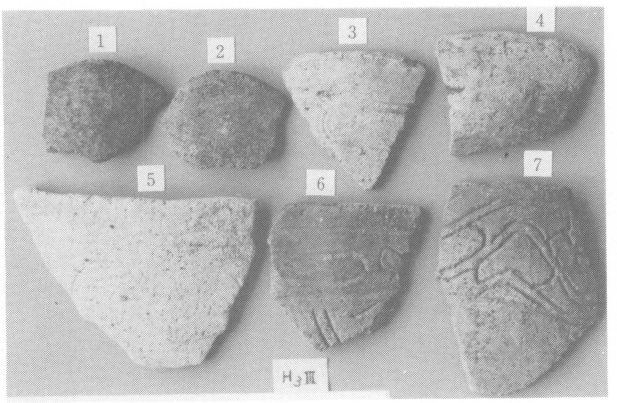


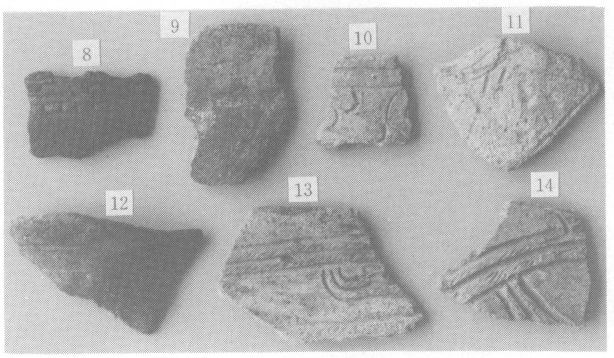
〔後期の土器〕

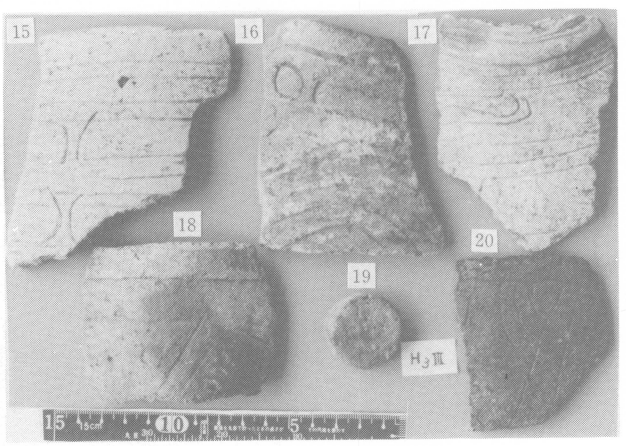
B.P.L12

（H3Ⅲ出土）

☆（1～20）→ { 第3群土器 十腰内Ⅰ式 }







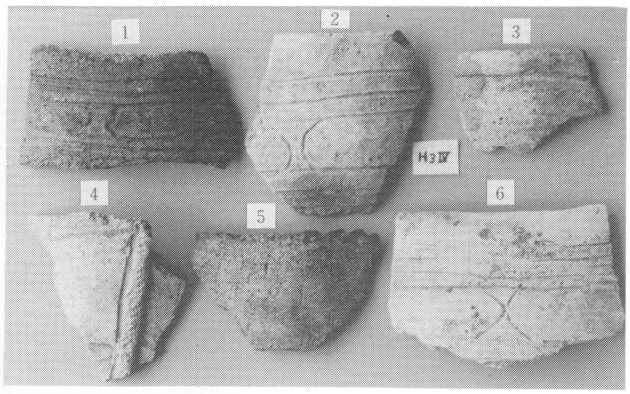
☆（19）＝底部

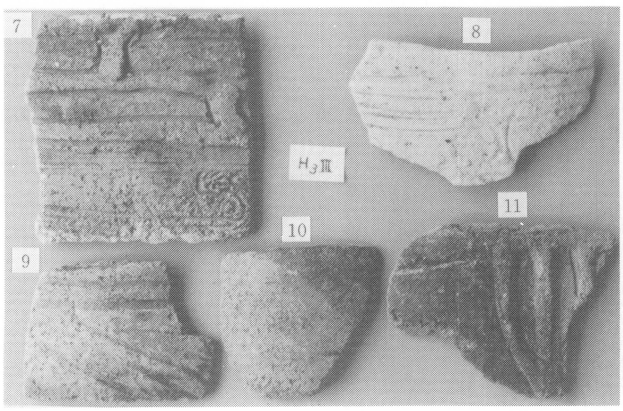
〔後期の土器〕

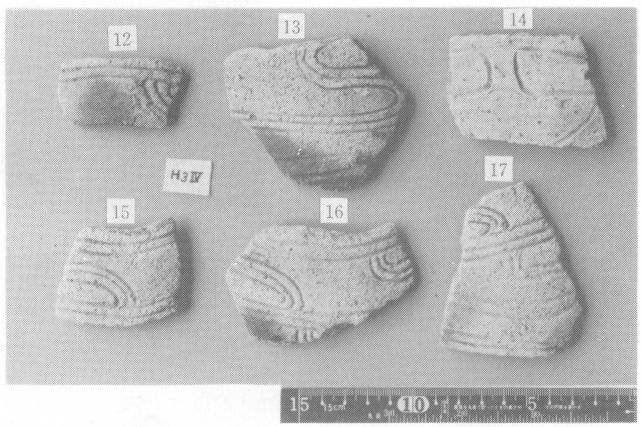
B.P.L13

（H3 Ⅲ～H3 Ⅳ出土）

☆（1～17）→｛第3群土器 十腰内Ⅰ式｝







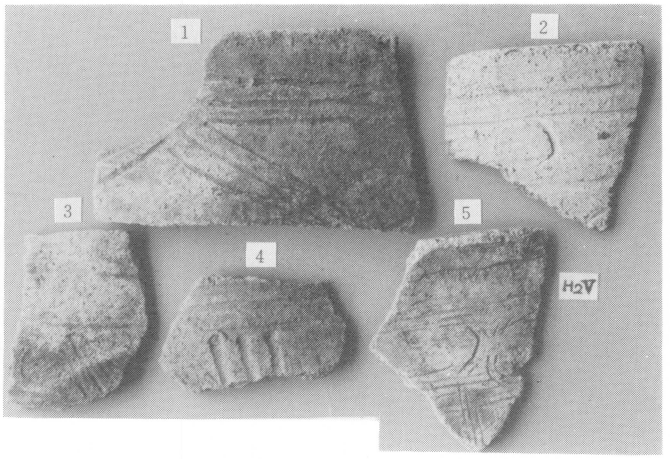
〔後期の土器〕

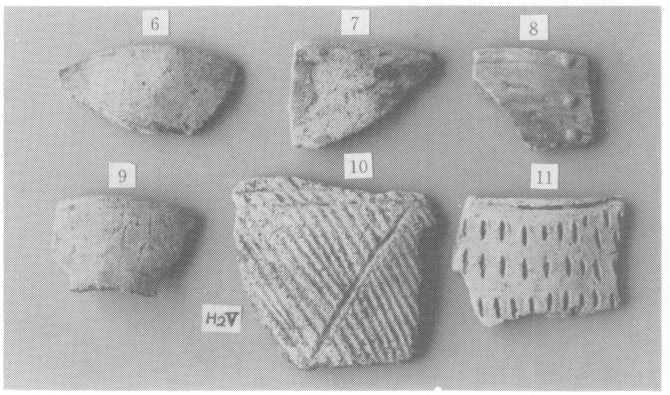
B.P.L14

（H2Ⅴ出土）

☆（1～5）→｛第3群土器 十腰内Ⅰ式｝

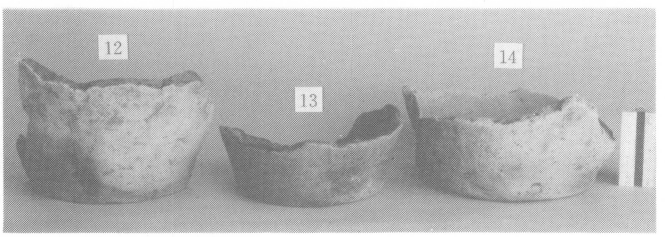
☆（6・7・9～14）→｛第4群土器 十腰内Ⅰ・Ⅱ式 の中間型式｝

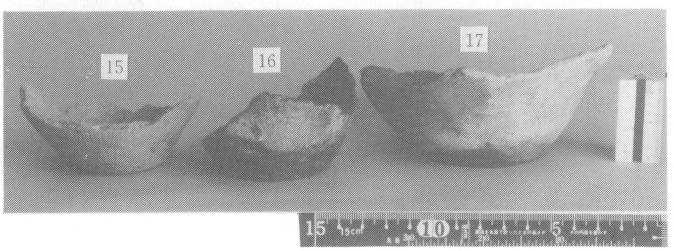




☆（8）→｛十腰内Ⅴ式？ （8）は、わずか2片の出土である。群別せず。｝

☆（12～14）は底部





☆（15）→晩期

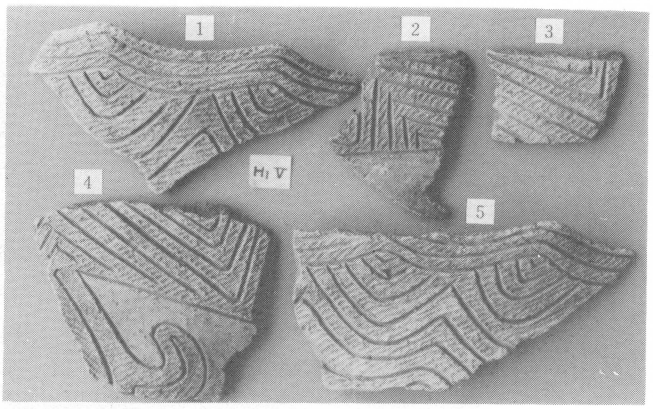
☆（16・17）→後期

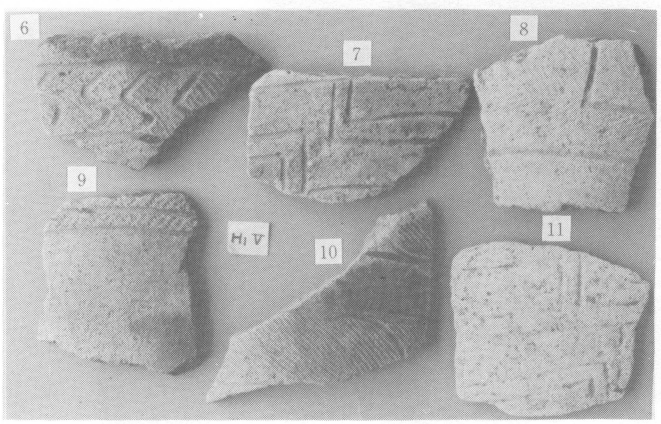
〔後期の土器〕

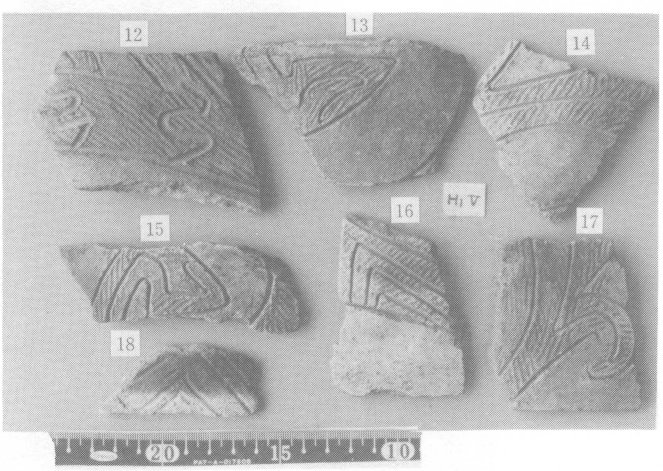
B.P.L15

（H1 V出土）

☆（1～18）→ { 第4群土器 十腰内Ⅰ・Ⅱ式 の中間型式 }





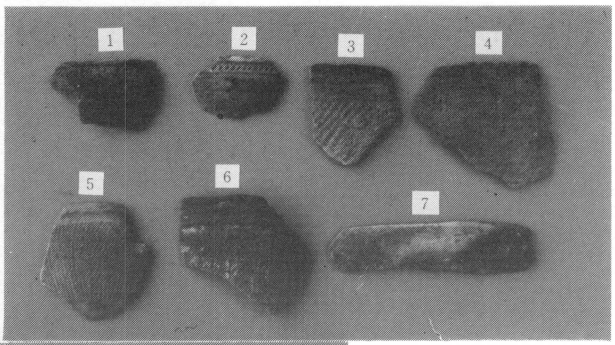


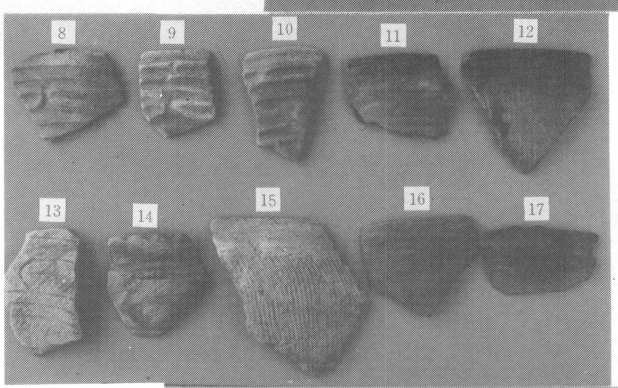
〔晩期の土器〕

（H1Ⅰ出土）

☆（1～4）→｛第7群土器 大洞C1式｝

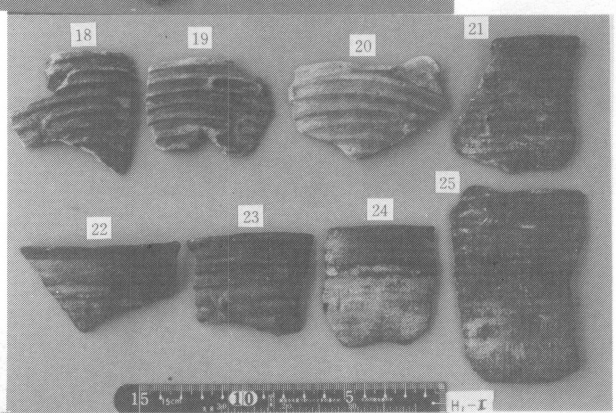
☆｛5～7、14、15、11・12、16・17、26・27・29・30｝→｛第8群土器 大洞C2式｝





☆｛8～10、18～25、28・31｝第10群土器 大洞A式

☆（13）→｛第8群土器 大洞C2式｝

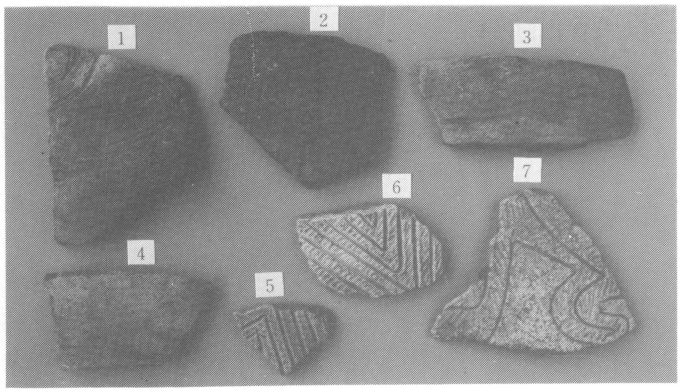


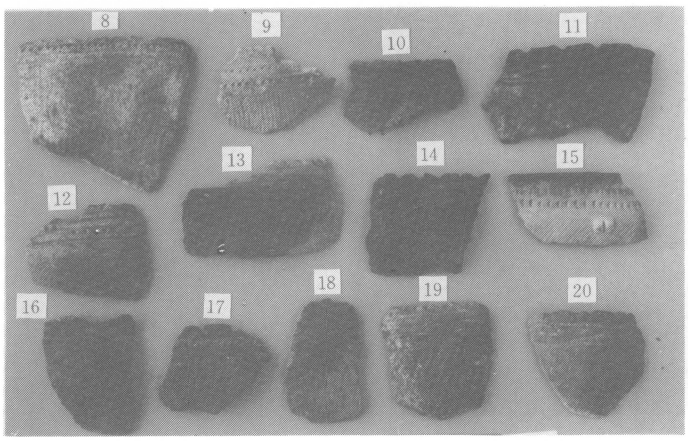
☆｛26・27 29・30｝→｛第8群土器 大洞C2式｝

（H1Ⅱ出土）

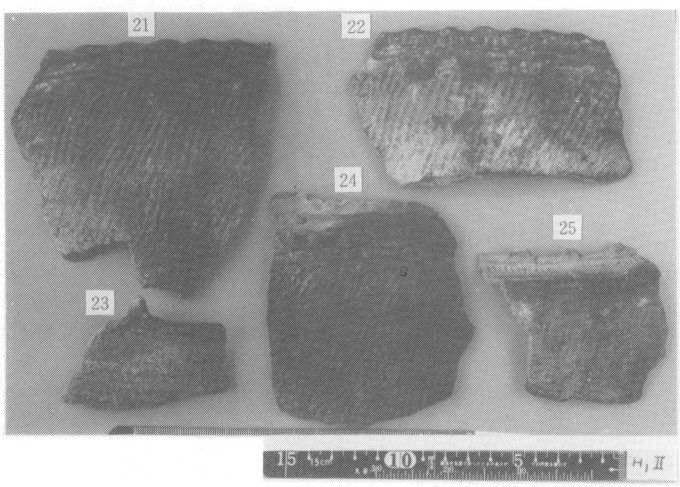
☆（1・2）→｛第3群土器 十腰内Ⅰ式｝

☆（3～7）→｛第4群土器 十腰内Ⅰ・Ⅱ式 の中間型式｝



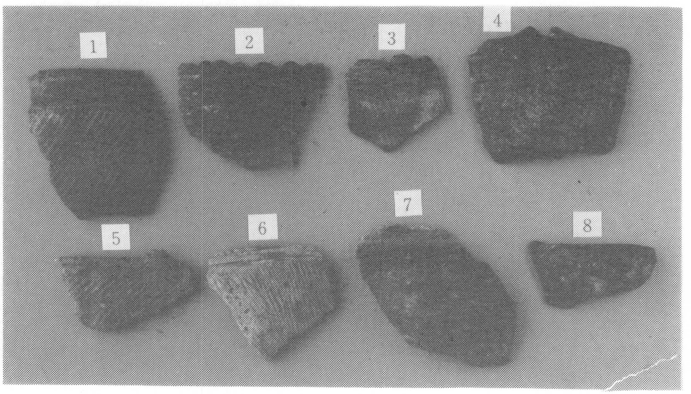


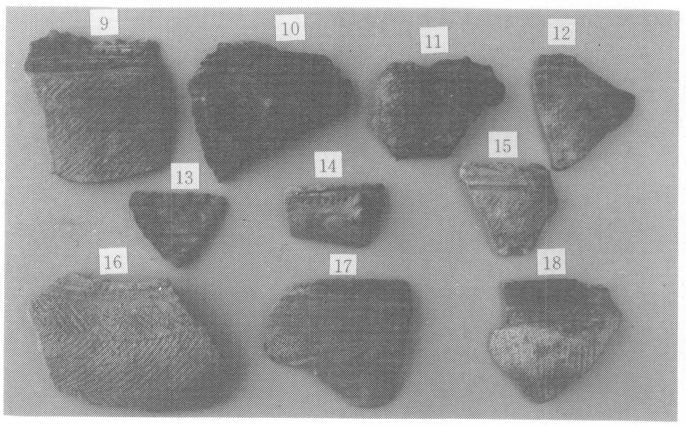
☆（8～25）→｛第7群土器 大洞C1式｝



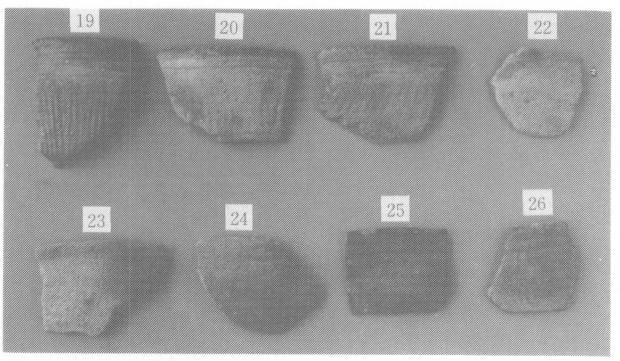
（H1Ⅱ出土）

☆（1～18）→｛第7群土器 大洞C1式｝





☆（19～26）→｛第8群土器 大洞C2式｝



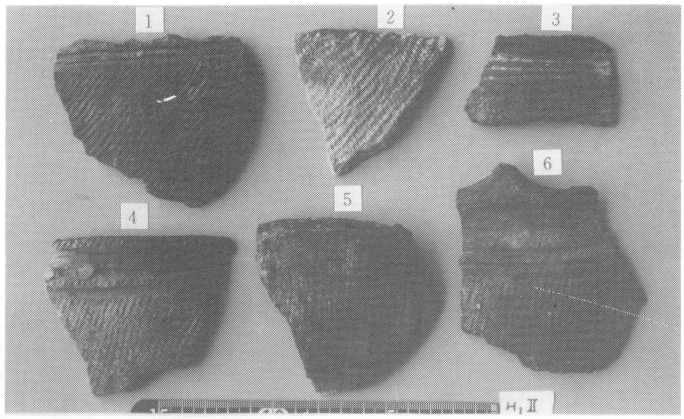
〔晚期の土器〕

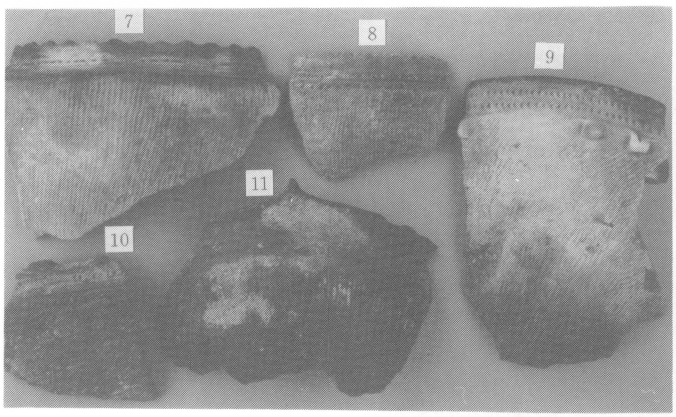
B.P.L19

（H1Ⅱ出土）

☆（1・5）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（2・3・4・6）→｛第8群土器 大洞C2式｝





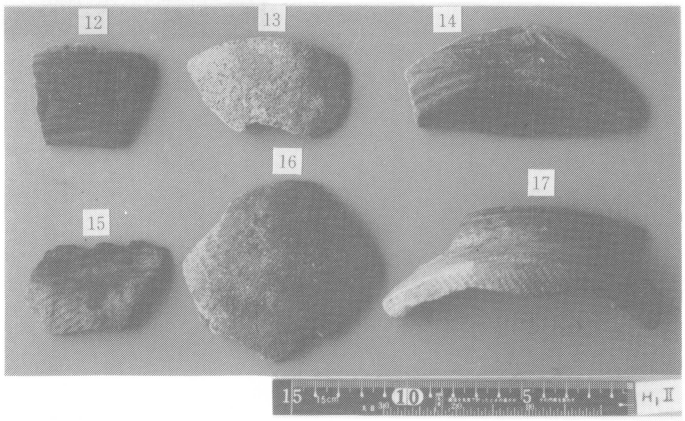
☆（7～10）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（11）→｛第8群土器 大洞C2式｝

☆（12・15）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（13・14・16・17）

→｛第8群土器 大洞C2式｝

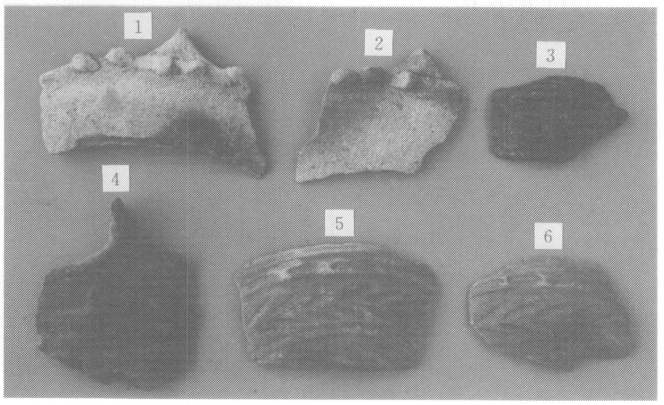


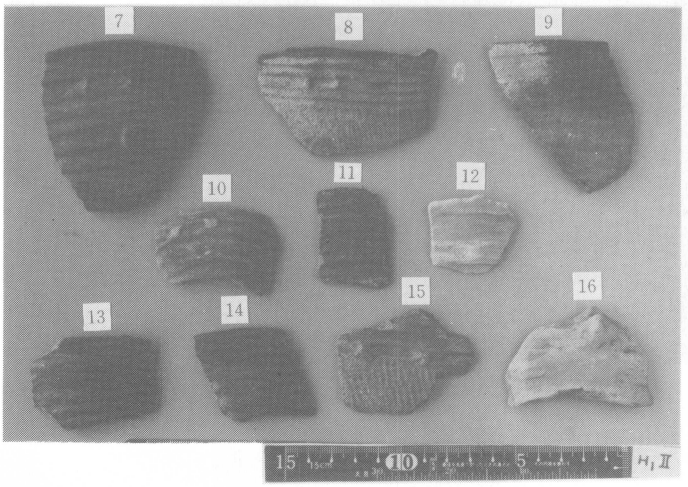
〔晩期の土器〕

B.P.L20

（H1Ⅱ出土）

☆（1～16）→ { 第10群土器 / 大洞A式 }

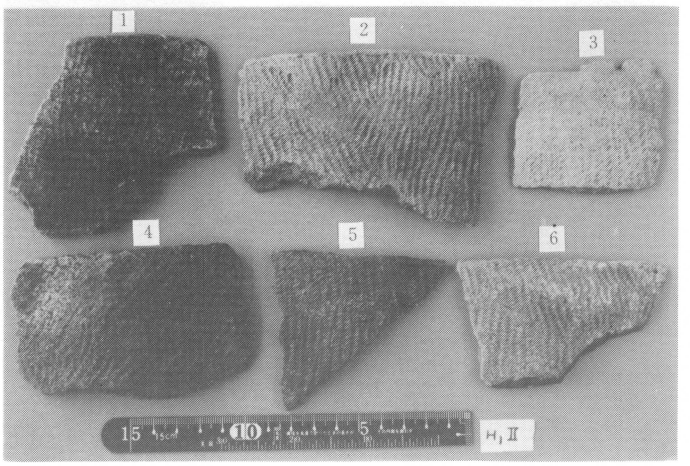




〔晚期の土器〕

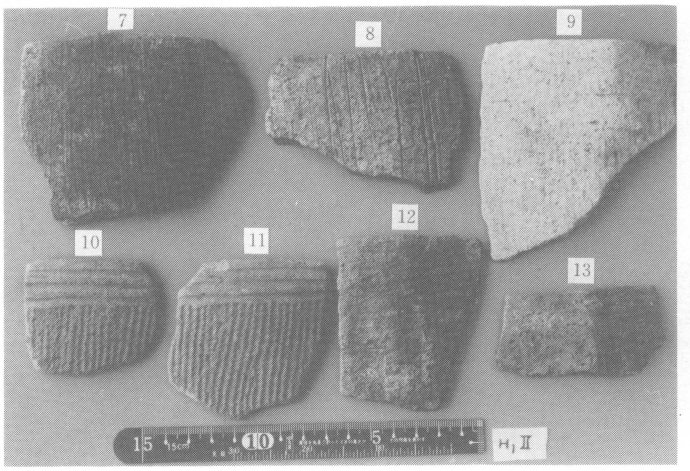
B.P.L21

（H1 Ⅱ出土）



☆（1～6）→｛第8群土器 大洞C2式｝

☆口縁直下より縄文の施文されるもの。

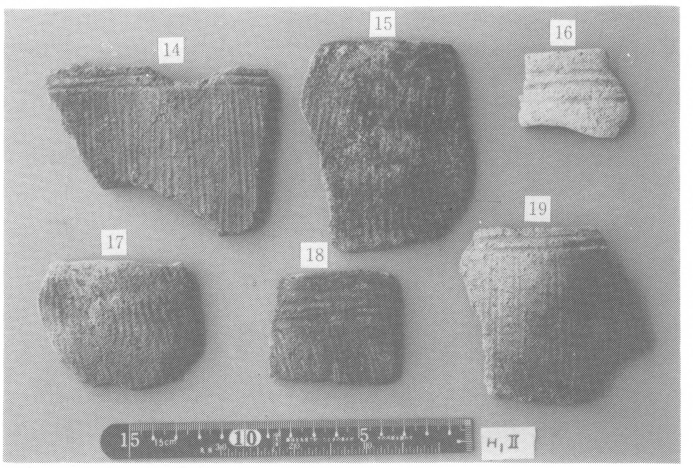


☆（7～13）→｛第8群土器 大洞C2式｝

☆（7～9・12・13）→条痕文の施文されるもの。

☆（10・11）→平行沈線文と単軸撚糸文の施文されるもの。

☆（14～19）→｛第8群土器 大洞C2式｝



☆（14・18・19）→平行沈線文と、条痕文のあるもの。

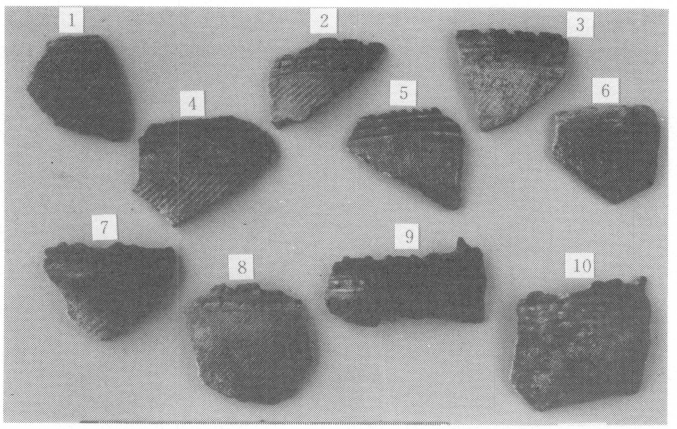
☆（15・17）→口縁直下より縄文の施文されるもの。

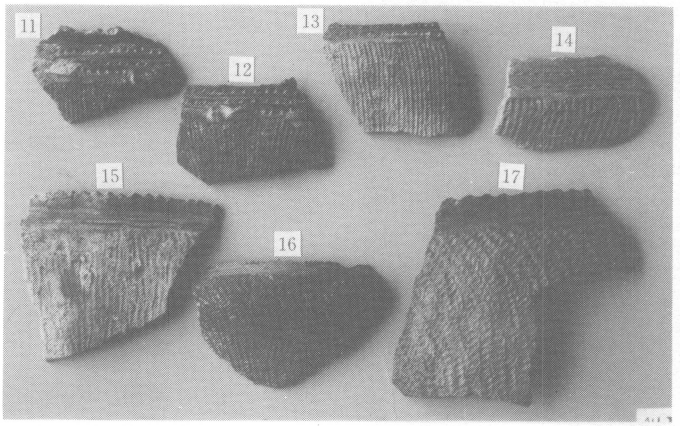
☆（16）→口頸部に平行沈線文の施文されるもの。

〔晩期の土器〕

B.P.L22

（H1Ⅲ出土）

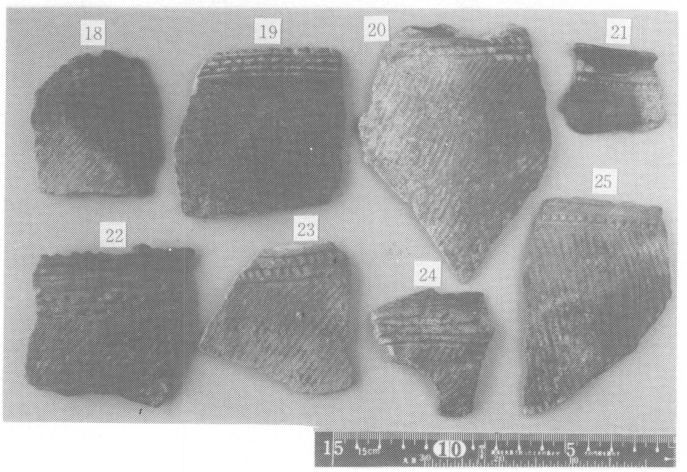




☆（1～25）→ { 第7群土器 / 大洞C1式 }

☆口頸部に刺突文が施文されるもの。

☆（胴部に斜行縄文、羽状縄文、斜軸撚糸文）が施文されるもの。

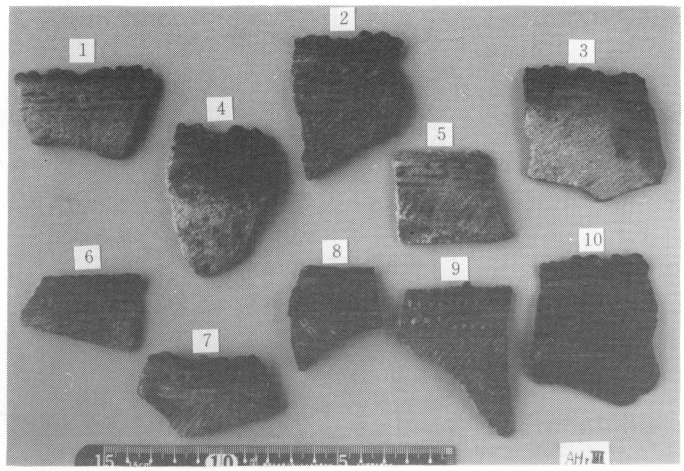


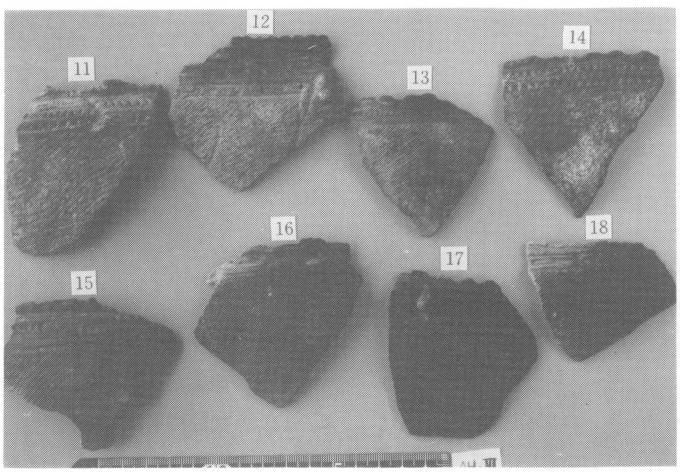
〔晩期の土器〕

B.P.L23

（H1Ⅲ出土）

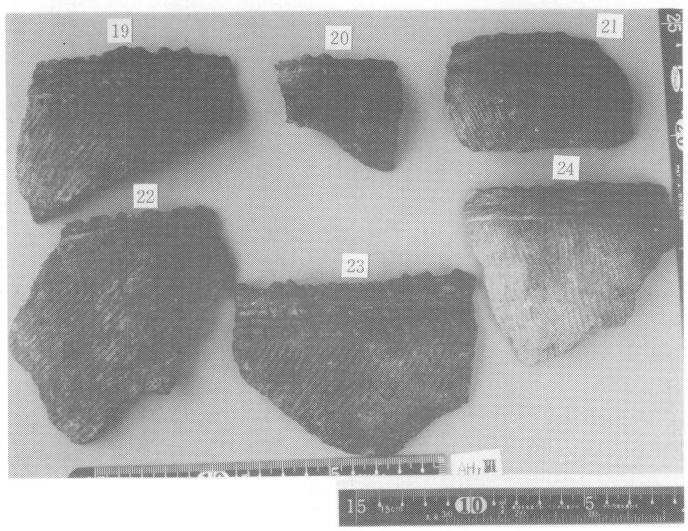
☆（1～24）→｛第7群土器 大洞C1式｝





☆口縁が小波状を呈し、頚部には刺突文をもつもの。

☆胴部には斜行縄文が施文されるもの。



〔晩期の土器〕

B.P.L24

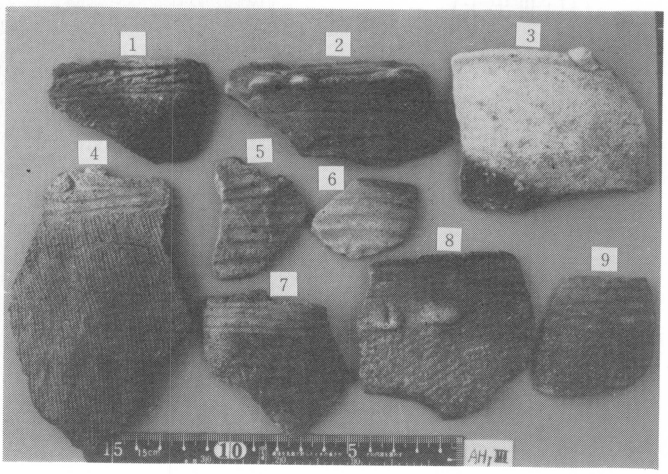
（H1Ⅲ出土）

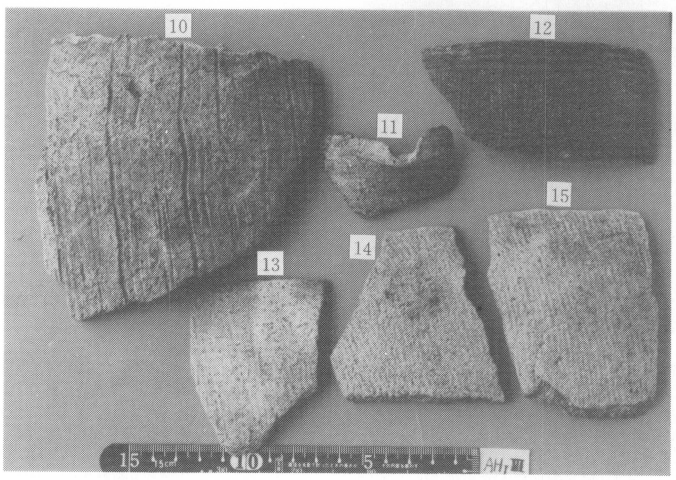
☆（1）→｛第6群土器 大洞B・C式｝

☆（2）→｛第7群土器 大洞C1式？｝

☆（3・4・7～9）→｛第8群土器 大洞C2式｝

☆（8）は大洞A式の疑いもある。また、（1）の大洞B・C式の出土は、数片のみである。





☆（5・6）→｛第10群土器 大洞A式｝

☆（10～15）→｛第8群土器 大洞C2式｝

☆（10）→口縁が小波状を呈し、条痕文の施文されるもの。

☆（12）→頸部に平行沈線文が施文され、単軸撚糸文が縦走するもの。

☆（13～15）→口頸部がやゝ内傾し、単軸撚糸文が施文されるもの。

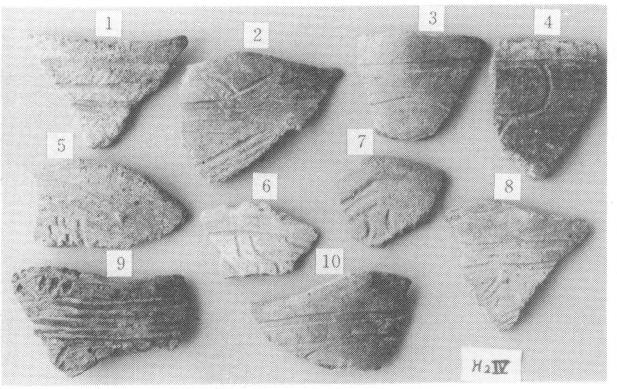
☆（11）は片口付土器

〔後期・晩期の土器〕

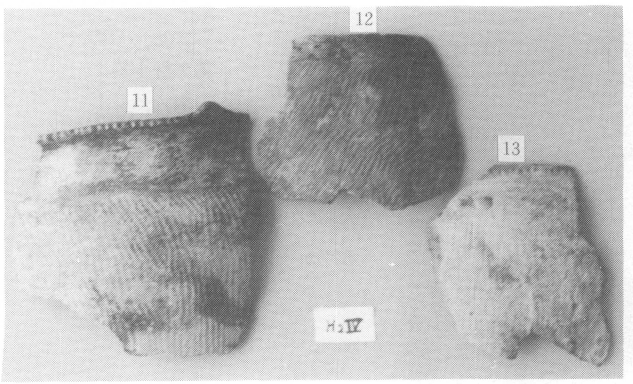
B.P.L25

(H1Ⅳ出土)

(H2Ⅳ出土)

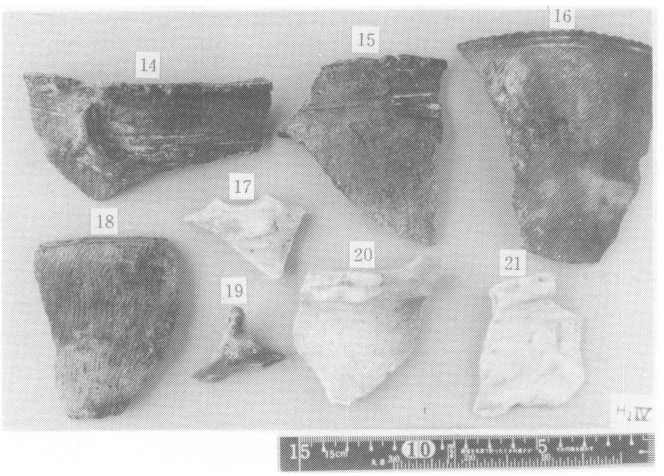


☆（1～10）→｛第3群土器 十腰内Ⅰ式｝



☆（11～13）→｛第7群土器 大洞C1式｝

※（11）は、大洞C2式の疑いもある。



☆（16・18）→｛第7群土器 大洞C1式｝

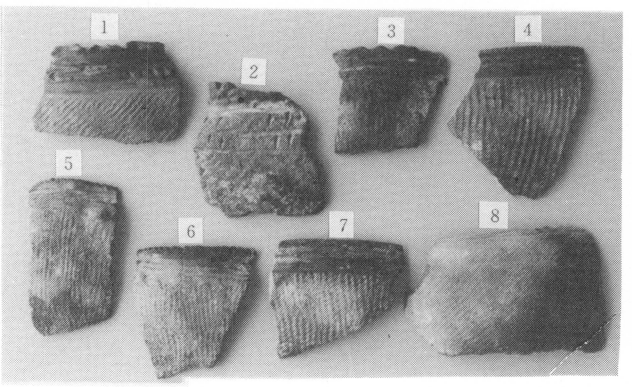
☆（14・15）→｛第8群土器 大洞C2式｝

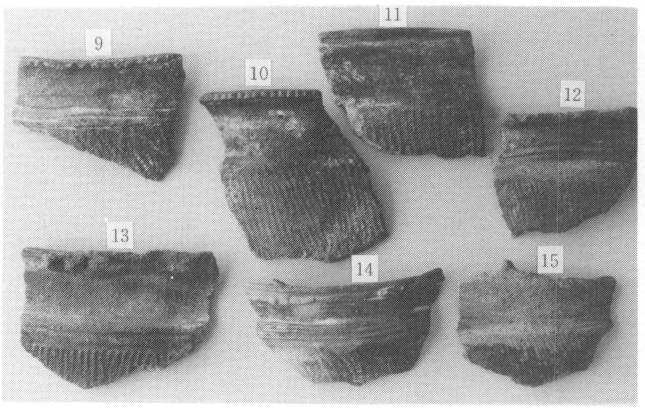
☆（17・19～21）→｛第10群土器 大洞A式｝

※（19）は突起。

（H1Ⅳ出土）

☆（1～8）→｛第7群土器 大洞C1式｝



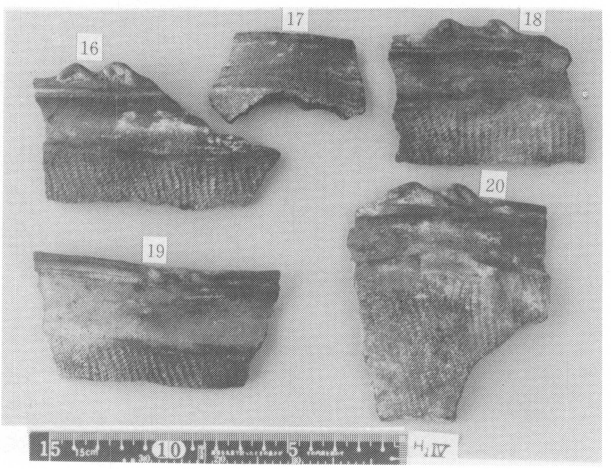


☆（9～15）→｛第7群土器 大洞C1式｝

※いずれも頚部の無文帯が広いもので、大洞C1 ～ 大洞C2式の間のものであろうか？

☆（16～20）→｛第8群土器 大洞C2式｝

※（9～15）と同様、肩部の張るタイプであるが一応第8群土器とした。

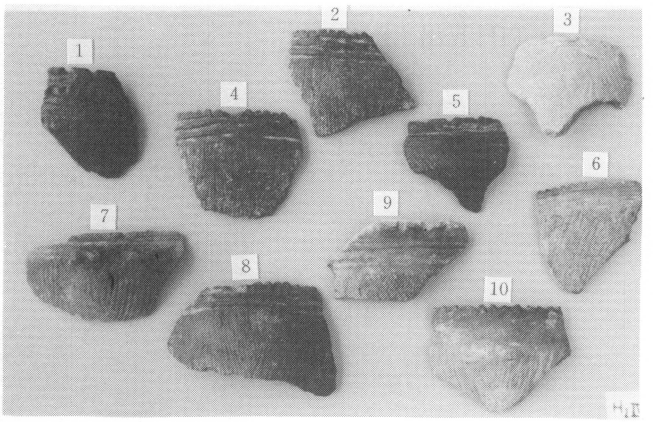


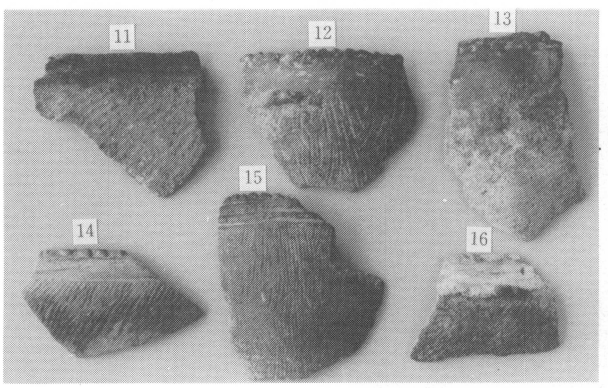
〔晚期の土器〕

B.P.L27

（H1Ⅳ出土）

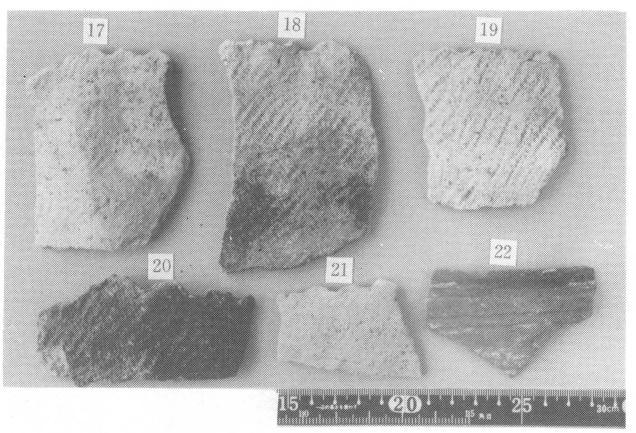
☆（1～10）→｛第7群土器 大洞C1式｝





☆（11～16）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（17～22）→｛第7群土器 大洞C1式｝



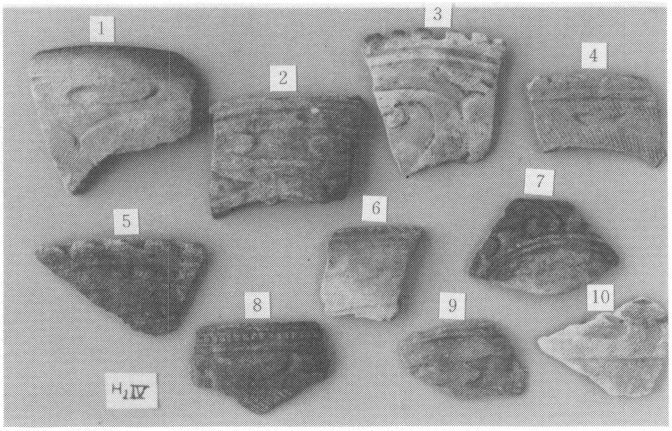
※（22）は、精製土器

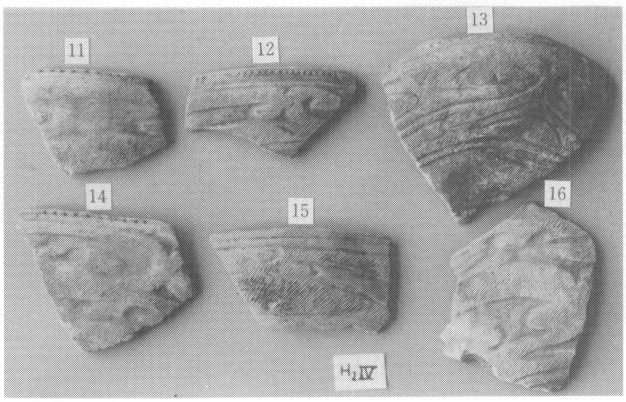
〔晩期の土器〕

B.P.L28

（H1Ⅳ出土）

☆（1～10）→｛第7群土器 大洞C1式｝

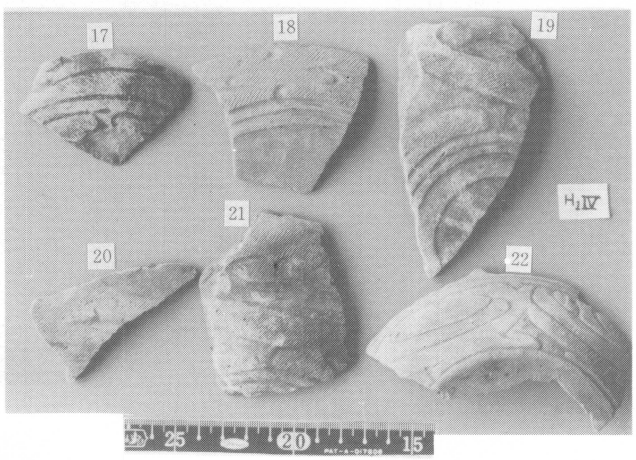




☆（11～16）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（17～22）→｛第7群土器 大洞C1式｝

※（1～22）→精製土器



〔晩期の土器〕

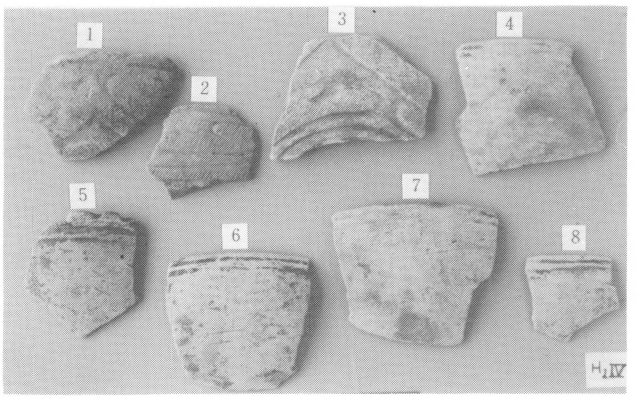
B.P.L29

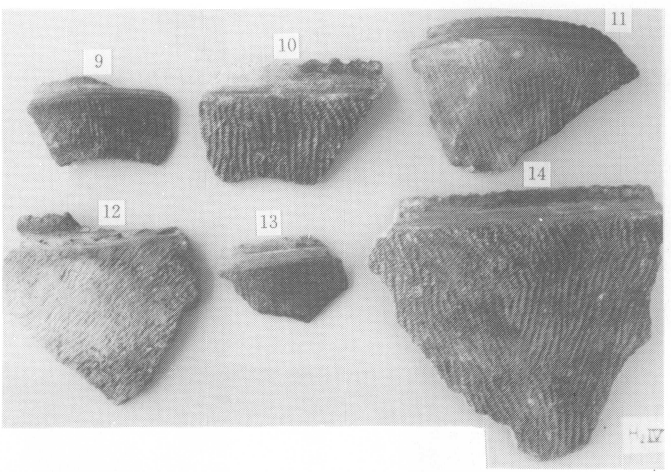
（H1Ⅳ出土）

☆（1～3）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（4～8）→｛第8群土器 大洞C2式｝

※（1～8）→精製土器





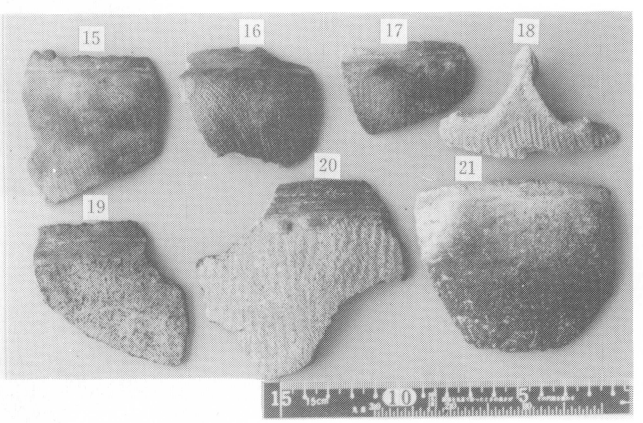
☆（9～14）→｛第7群土器 大洞C1式｝

※粗製土器（9～14）

☆（15・16・21）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（17～20）→｛第8群土器 大洞C2式｝

※（15～21）→粗製土器

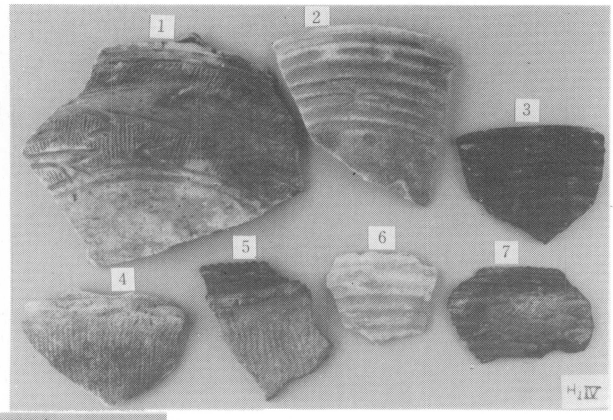


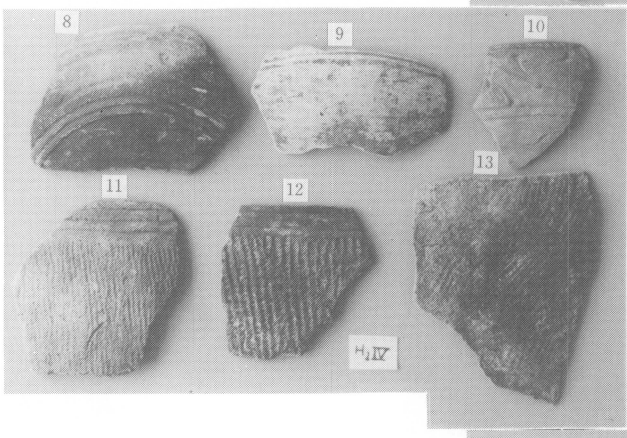
（H1Ⅳ出土）

☆（1～3，6・7）→｛第10群土器 大洞A式｝

※（1・7）→精製土器

☆（4・5）→｛第7群土器 大洞C1式｝



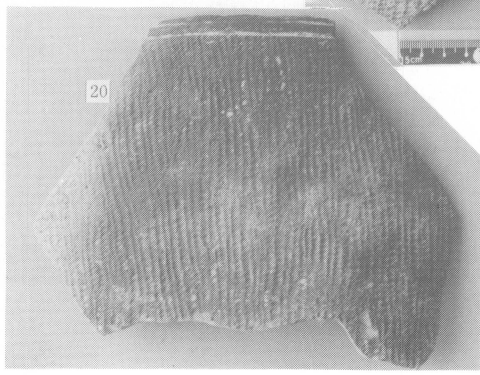


☆（10）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（8・9・11～13）→｛第8群土器 大洞C2式｝

※（8・9）→精製土器

☆（14～20）→｛第8群土器 大洞C2式｝



※（14～19）→口縁直下より斜行縄文、単軸撚糸文のあるもの。

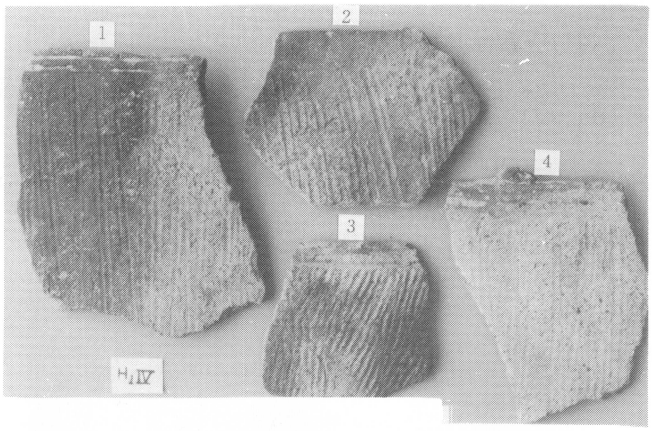
※（20）→平行沈線文と、単軸撚糸文のあるもの。

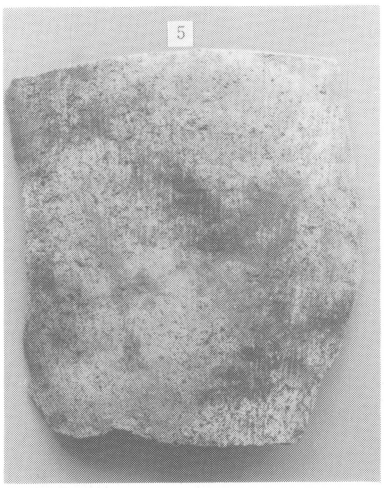
〔晩期の土器〕

B.P.L31

（H1Ⅳ出土）

☆（1～9）→｛第8群土器 大洞C2式｝





☆（1・4）→口頸部に平行沈線文と、胴部に条痕文のあるもの。

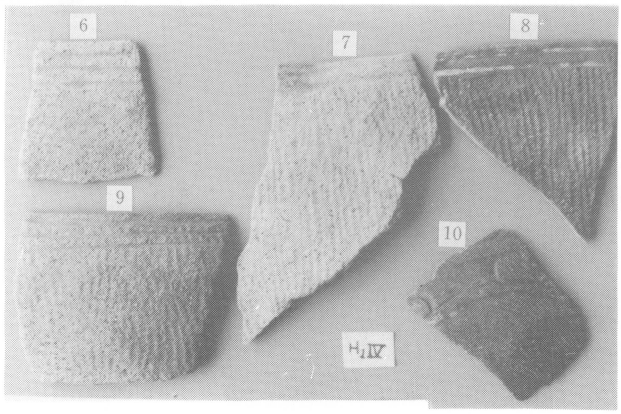
☆（2）→口頸部が無文帯をなし、肩部下に条痕文のあるもの。

☆（3・6・9）→口頸部に平行沈線文が施文され、肩部下に縄文のあるもの。

☆（5）→口縁直下より、条痕文が施文されるもの。

☆（7・8）→口頸部に平行沈線文があり、肩部下に単軸撚糸文の施文されるもの。

☆（10）→｛第7群土器 大洞C1式｝

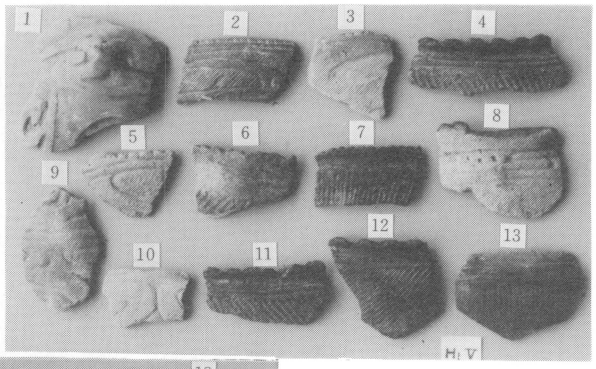


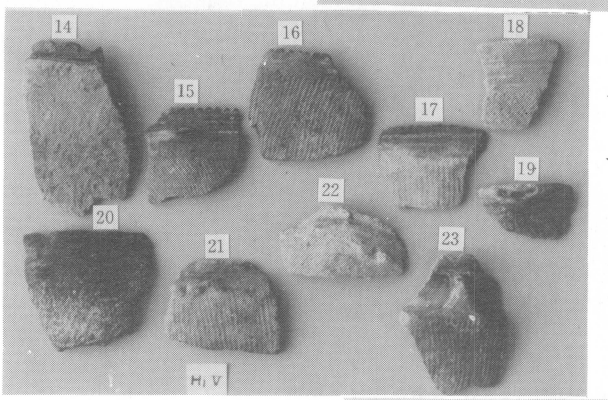
（H1Ⅴ出土）

※（H1＝グリット名、Ⅴ＝5層の意）

☆（1～13）→｛第7群土器 大洞C1式｝

※（1～3・5・9・10）→精製土器



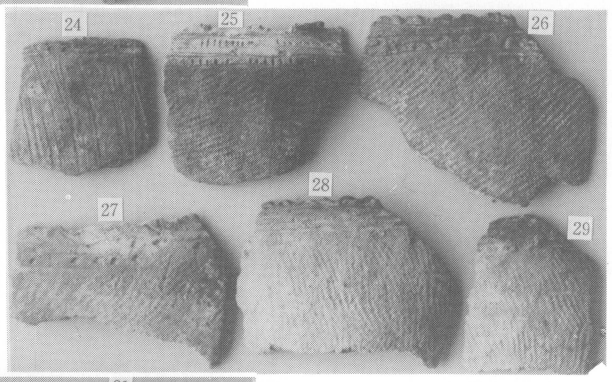


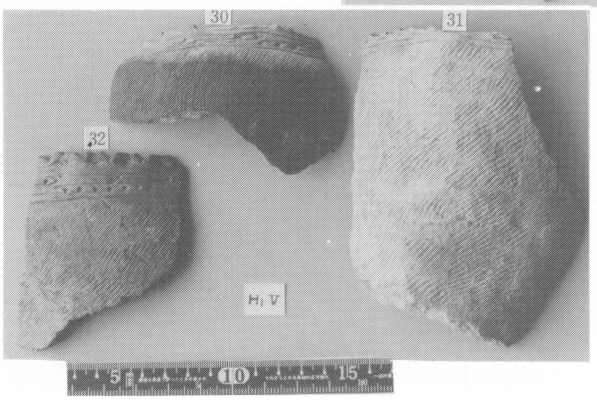
☆（14～23）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（19）→片口付鉢形土器

☆（24～29）→｛第7群土器 大洞C1式｝

※（24）→刺突文と条痕文のあるものは稀少である。





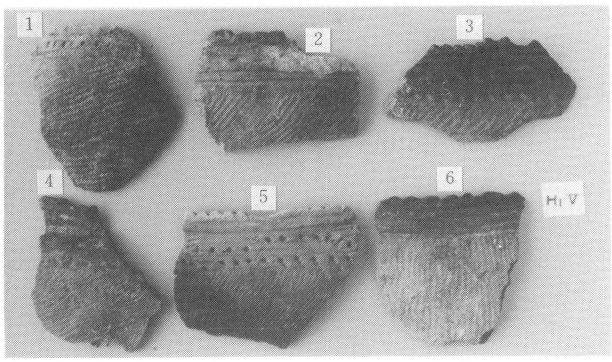
☆（30～32）→｛第7群土器 大洞C1式｝

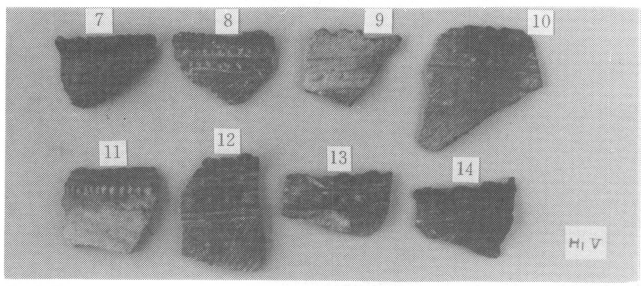
〔晩期の土器〕

B.P.L33

（H1Ⅴ出土）

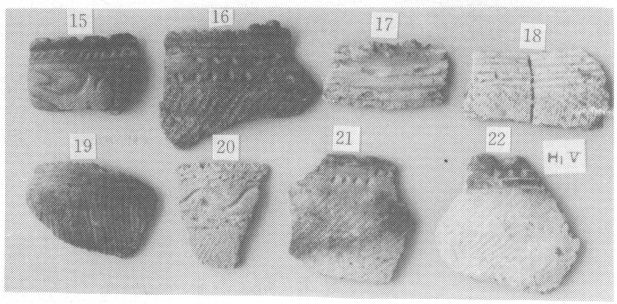
☆（1～31）→ { 第7群土器 / 大洞C1式 }

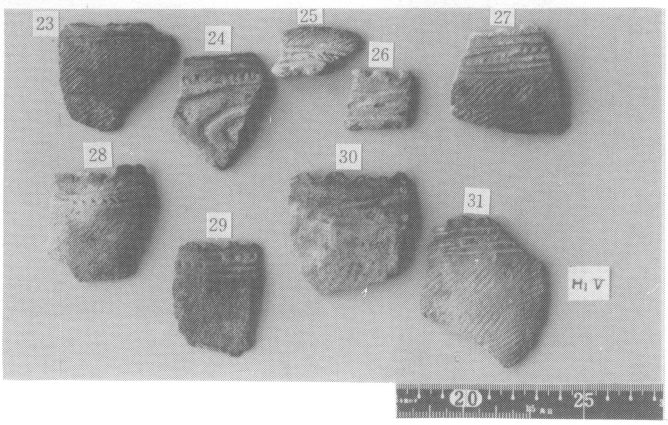




※（15）→精製土器

※（20）→大洞C1式と同B・C式の施文要素をもつもの。



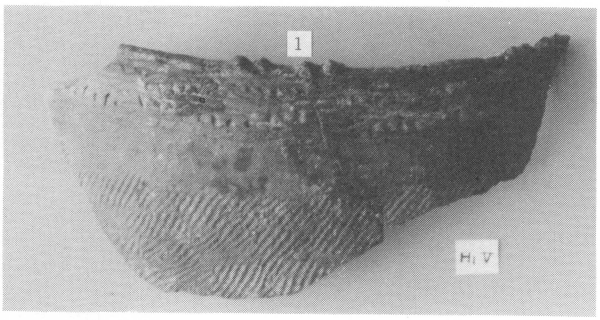


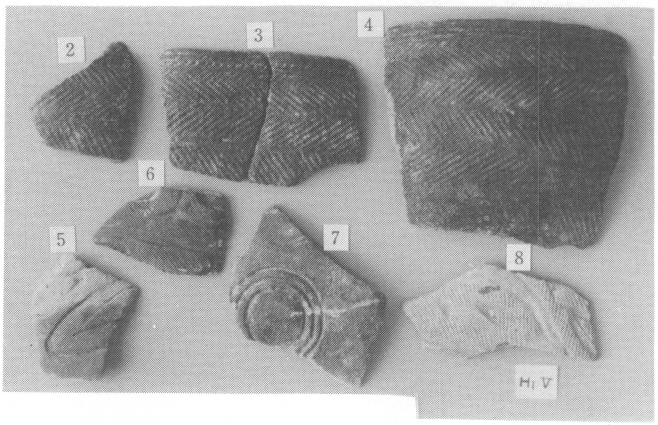
☆（24）→精製土器の疑いもある。

（H1Ⅴ出土）

☆（1～5・8）→｛第7群土器 大洞C1式｝

※（5・8）→精製土器





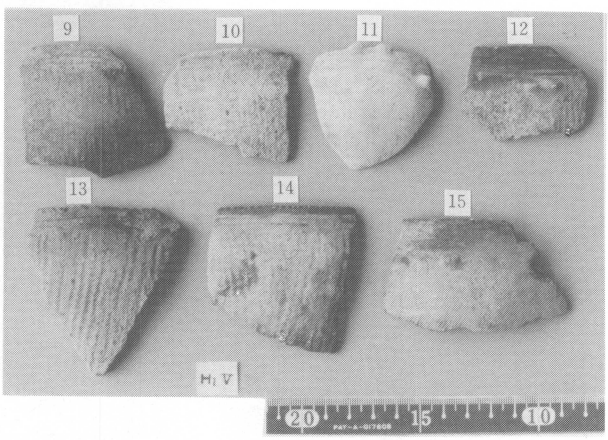
☆（6）→｛第9群土器？（聖山式） 大洞C2～A式（仮称）｝

☆（7）→｛第8群土器 大洞C2式｝

※（2～4）の羽状縄文はめずらしい。

☆（9・13・14）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（10～12・15）→｛第8群土器 大洞C2式｝



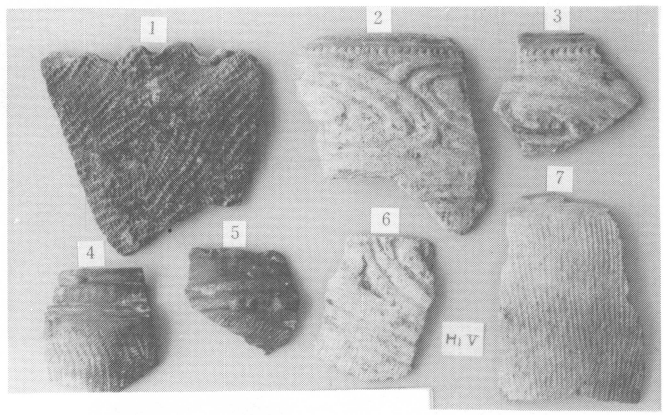
〔晩期の土器〕

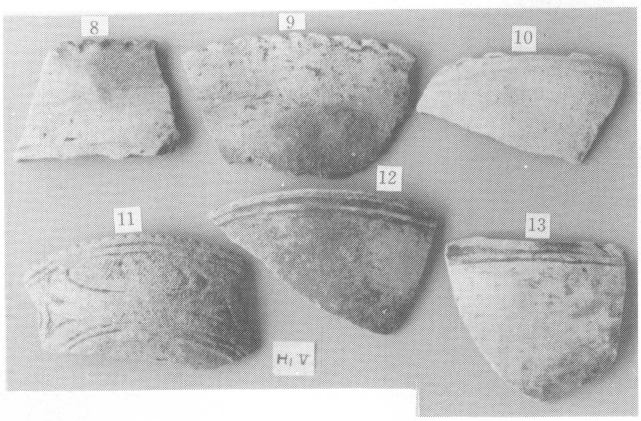
B.P.L35

（H1V出土）

☆（1～3・7）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（4～6）→｛第8群土器 大洞C2式｝





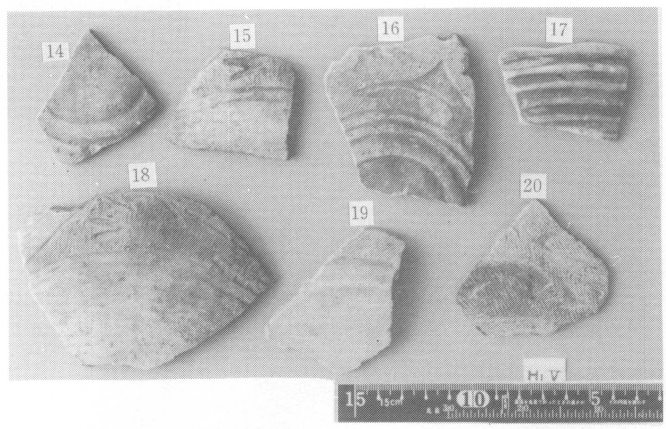
☆（8・9）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（10～13）→｛第8群土器 大洞C2式｝

※（11～13）→精製土器

☆（14～16・19・20）→｛第8群土器 大洞C2式｝

☆（17・18）→｛第10群土器 大洞A式｝

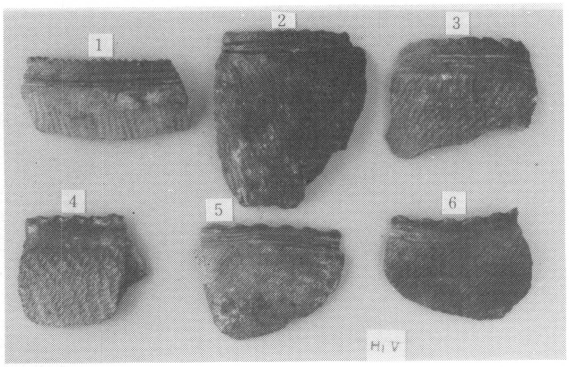


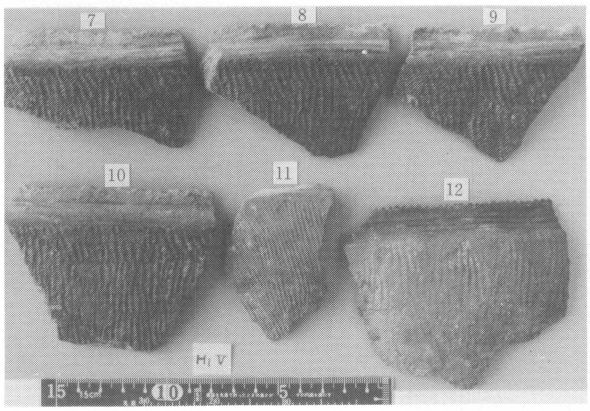
〔晩期の土器〕

B.P.L36

（H1Ⅴ出土）

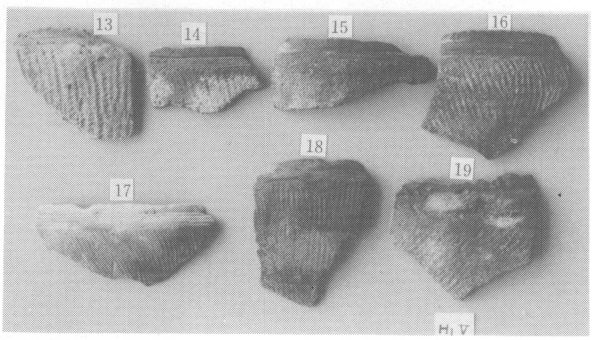
☆（1～6）→｛第7群土器 大洞C1式｝

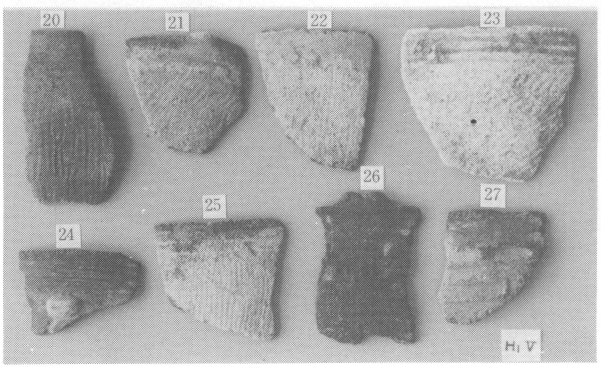




☆（7～12）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（13～19）→｛第7群土器 大洞C1式｝





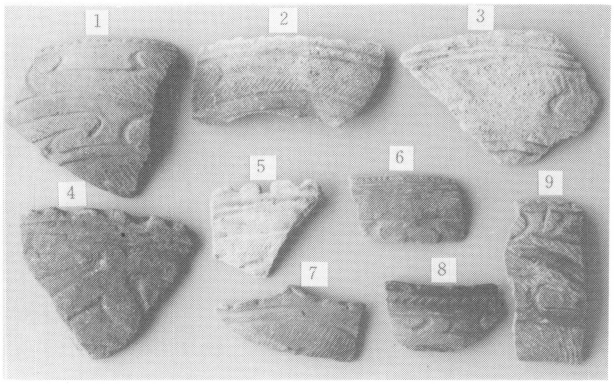
☆（20～25）→｛第8群土器 大洞C2式｝

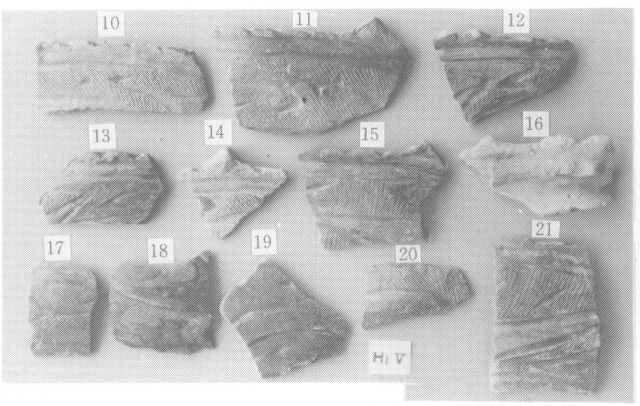
☆（26・27）→｛第10群土器 大洞A式｝

（H1 V出土）

☆（1～9）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（1～9）は精製土器





☆（10～15）→｛第7群土器 大洞C1式｝

☆（17～21）→｛第7群土器 大洞C1式？｝

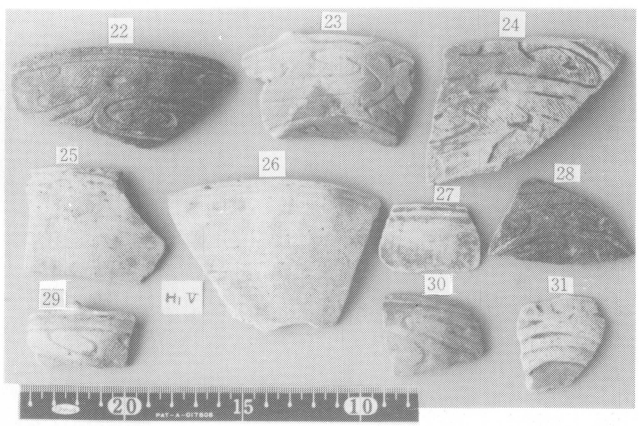
☆（16）→｛第10群土器 大洞A式？｝

※（10～21）は精製土器

☆（22･24～27･29～31）→｛第8群土器 大洞C2式｝

☆（23・28）→｛第7群土器 大洞C1式｝

※（22～31）は精製土器

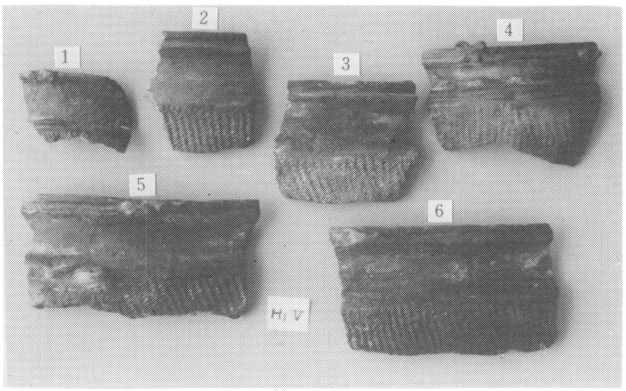


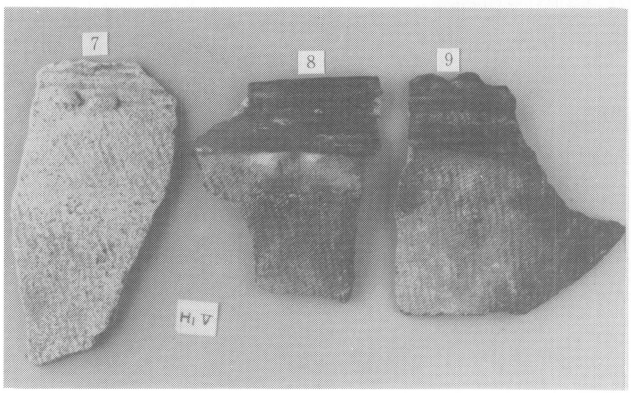
〔晚期の土器〕

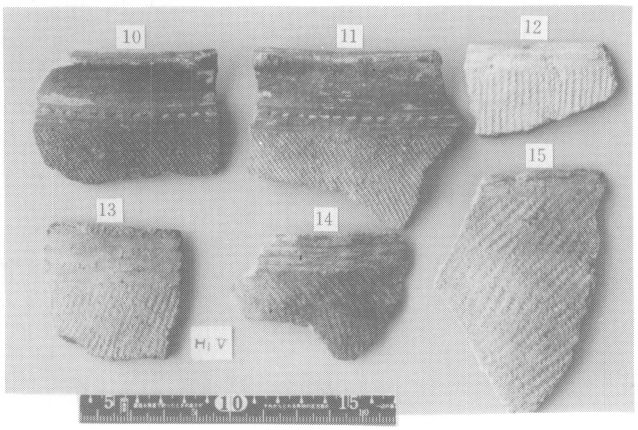
B.P.L38

（H1Ⅴ出土）

☆（1～6）→｛第8群土器 大洞C2式｝





☆（7～9）→｛第8群土器 大洞C2式｝

☆（10～15）→｛第8群土器 大洞C2式｝